



雜誌『改造文藝』（改造社）解題（解題）

吳, 海洋 ; 都田, 康仁 ; 西田, 正慶 ; 張, 蔡粵緣 ; 長澤, 拓哉 ; 河内, 美帆 ; 霍, 思静 ; 梁, 馨蓉 ; 星住, 優太 ; 金, 善泰 ; 王, 雅馨 ; 朱, 信樺…

(Citation)

國文論叢別冊, 1:83-113

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483220>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483220>



■ 解題

雑誌『改造文藝』（改造社） 解題

呉海洋 都田康仁 西田正慶 張蔡粵縁 長澤拓哉
河内美帆 霍思靜 梁馨蓉 星住優太 金善泰
王雅馨 朱信樺 伊藤日依梨 川上優芽 梶尾文武

はしがき

山本実彦率いる改造社は一九三三年一月、『文学界』や『新潮』に次ぐ後発の文芸誌として『文藝』を創刊した。四四年七月のいわゆる「横浜事件」を機に解散を命じられた改造社が廃業したため、本誌は通巻一二九号をもって廃刊となる。これに伴い、『文藝』は日本出版協会の仲介により河出書房が一〇万円で購入し、四四年一月、野田宇太郎の編集下で新たに創刊された¹⁾。

戦後に再建された改造社は、四六年一月に旗艦誌『改造』を、六月には女性誌『女性改造』を復刊した。これらに続き、改造社が新たな文芸誌として四八年一月に創刊したのが、『改造文藝』である。改造社にとって、本誌は『文藝』の後身として位置づけられる。初代編集長は、山本実彦の息子俊太が務めた。改造社社長にして政治家でもあった父実彦が、労働組合との対立や公職追放により苦境に立たされるなか、山本俊太は四九年に社長に就任、

二号からは営業畑出身の平田貫一郎が本誌の編集発行人を担った。

なかでも、作家の没後まもなく始まった『横光利一全集』（全三三巻、一九四八・四九・一九五〇・九）の刊行は、「改造社が他社と競合の末実現したもので、当時としては最も大きな企画のひとつであった²⁾」とされる。そもそも、「横光利一の作家活動とその評価は、改造社ならびに『改造』という出版メディアの趨勢と軌を一にし、両者の関係は見事に呼応する³⁾」と言われるほど、横光は改造社にとって不可欠な作家であった。横光の死は一九四七年一月、『改造文藝』の創刊は翌四八年一月のことである。本誌創刊号は「横光利一追悼」と銘打たれている。没後直ちに横光追悼特集として発刊された本誌創刊号は、同年四月からの改造社版全集の刊行を留意したと考えられよう。

改造社内このような流れを作ったと目される社員の一ひとは、かつて横光に小説家として師事したこともあるという編集者、大輪好輝である。『改造文藝』創刊号に掲載された横光の年譜は、大

輪が作成したものである。本誌発刊に前後して、改造社を離れて古書店・白樺書院を東京下北沢で興した大輪は、『横光利一全集』の刊行に際しては編集の裏方を務めたと言われている⁵⁾。なお大輪は一九五〇年代、雑誌『文学者』に詩人として参加、数編の詩作品を掲載している。『文学者』は丹羽文雄率いる「十五日会」を発行母体としており、丹羽のほか井上友一・郎らその同人が『改造文藝』執筆陣の一角を占めている。なお、のちに本誌(通巻八号)に掲載された中村光夫「二葉亭と女郎屋」・丹羽文雄氏には、丹羽との間で戦わされたいわゆる「風俗小説論争」の発端となった。

改造社は一九四九年に「横光利一賞」と称する文学賞を創設し、『改造文藝』はその発表媒体となった。詮衡委員は川端康成・小林秀雄・中山義秀・河上徹太郎・林芙美子・橋本英吉・井伏鱒二・豊島与志雄の八名。旧『文学界』グループを中心とした布陣であり、本誌の編集方針にもっとも強い影響を及ぼしたのは彼らであったと見られる。第一回は大岡昇平「俘虜記」(通巻四号)、第二回は永井龍男「朝霧」(通巻一四号)が受賞した。

一九四八年五月、川端康成は志賀直哉のあとを継ぎ、日本ペンクラブ会長に着任した。その右腕として戦後ペンクラブの事務局長を務めた編集者が、水島治男である。戦前に『改造』編集長の座にあった水島治男は、横光や川端、小林秀雄らを新人時代から知っていた。横浜事件に連座し、治安維持法で逮捕された苦い過去を持つ。戦後、水島は日本電報通信社(電通)、大地書房、世界文化社と職場を転じているが、この間、総合雑誌『世界文化』(一九四六・二〜四九・五)を各社に版元を移しつつ編集した。この雑誌の執筆陣が「世界文化研究会」を結成、ペンクラブ再建の屋

台骨を担うことになる。一九四七年、「私も『世界文化』の編集にたずさわるかたわら、そして『世界文化研究会』をまとめていたこともあって、この日本ペンクラブの書記局に身を置き、ペン再建に参加したのである」⁶⁾とは、のちの水島の回想である。詳しくは各号の解題に譲るが、おそらくは川端およびペンクラブを介してであろう、水島が戦後も改造社に一定の影響力を持っていたことを本誌は窺わせる。

父の公職追放を受けて、四九年には山本俊太が社長に就任、翌五〇年に『改造』は創刊三十周年を迎えた。当時の社の様子を知る松浦総三は、「かれはとうい伝統ある改造社社長たる器ではなかったが、反共意識だけは人一倍」⁷⁾だったと評するが、この頃から『改造』の論調は反共色を強めていった。こうした方針転換は『改造文藝』にも見受けられる。四九年九月号(通巻七号)には、旧国鉄副総裁・加賀山之雄の文章が掲載されている。総裁が轢死体で発見された、いわゆる「下山事件」(同年七月)を組合内の先鋭分子の所業であると仄めかし、国鉄における人員整理の正当性を説く一文である。同時代に立て続けに起こった三鷹・下山・松川事件については、「それらの事件を一方的に日本共産党の仕業とさめつけるのが、当時の『改造』編集部の方針であった」⁸⁾という。GHQによる締め付けを受けての対応ではあるが、右の論調が示すように、レッド・パージの時代に追従する編集方針については反発する社内声も大きかった。

一九五〇年九月、本誌は通巻一六号をもって休刊状態に入る。翌五一年、不渡手形を出した改造社は、出版活動の縮小へと舵を切ることをやむなくされた。創設以来の改造社および『改造』の

動向については、水島治男による『改造社の時代』（図書出版社、戦前篇Ⅱ一九七六・五、戦中篇Ⅱ一九七六・六）や、松浦総三らの編による『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』（光和堂、一九七七・五）に詳しい。しかしそれらの社史的記述のなかでも、『改造文藝』についてはほとんど言及されていない。改造社の解体に伴ったことであろうが、本誌掲載の小説作品には、その後単行本に収められず宙に浮いたままになってしまったものも少なくない。本稿は、この雑誌『改造文藝』の内容を紹介し、戦後文学の動向の一面面に光を当ててみることを試みたい。

（梶尾文武／かじお ふみたけ）

各号解題

■創刊号（一九四八年一月）

今号は「横光利一追悼」と題して刊行されている。創作欄掲載の作品は四篇。丸山金治の代表作「四人の踊り子」（四人の踊り子）改造社、一九四八・三二）、林芙美子「荒野の虹」、火野葦平「指」、里見弴「内証事」。このうち、神戸出身の丸山金治は里見の弟子であるが、一九四八年二月に死去した。遺著「四人の踊り子」の巻末には、大輪が作成した丸山の年譜が付されている。

片山敏彦「西欧精神の歌」は、ツヴァイクを中心に論じた文章。片山は西欧の反戦的な作家の根底にヒューマニズム精神があることを指摘し、戦後日本の再建には真の意味での教育が必要だと訴える。子供に自分の故郷を愛することを教えるとともに、世界全般を愛するように説く片山の言説は、大正期の教養主義的な人生観が色濃い。阿部次郎「改造文藝」に餞す」は創刊にあたり本誌

に期待するところを記す。戦後の退廃から回復し世界に対して独自の新使命を持つこと、文芸における自然、人生、魂に対する美的感覚を涵養すること、新たに見直された日本を描く作品を奨励すること、さらにそのために世界的眼光を開発することの必要性を説いている。こうした言説は、抽象的な観念だけで国家を超越できるという大正知識人の幻想が、戦後にも残存していることを窺わせる。

北原武夫「文壇と文学」は、桑原武夫の提起した文学と人生の議論に賛同し、それを無視した文壇を批判する。フランス文学と日本文学の相違を「私小説」という観点から論じ、近代的自我の欠落が根本の問題だと北原は論ずる。さらに、里見弴「見事な醜聞」の題材に関して、作家本人にとつての切実さが感じられない点を批判した。梅崎春生「日本の空白について」は、戦時中、東京都庁に勤務して梅崎が、当時のミンギやフリタマといった無意味な行事を振り返りつつ日本文化の特質を論ずる。「日本の空白」としての空疎な「美」は歴史上重大な意味を果たしたが、現代においては単なる退廃でしかないと述べる。天皇制システムへの梅崎による批判として読める一文である。

伊藤整「鳴海仙吉の詩」は、オデュッセウス（ユリシイズ）の神話を下敷きに文壇を諷刺しつつ、みずからを「私は数知れぬ学説の漂ふ堆積に埋もれた二十世紀の乞食」と卑下する詩作品。「西欧」への視線を通して日本文壇を批判する点は、今号掲載の片山、北原の評論と重なる。伊藤の長篇小説『鳴海仙吉』はジョイス「ユリシイズ」の影響下にあると言われるが、この詩篇はその問題を考察する上も一助となるだろう。

石田波郷「荒風」は、前半に「横光利一氏を喪ひて四句」とする連作であり、後半にそのほかの六句を配する。このうち後半に置かれた「霜の墓抱き起されしとき見たり」は、病床に臥す波郷のいわゆる境涯俳句の代表作である。前半四句は『惜命』（作品社、一九五〇・六）収録に際し「横光利一死」の八句に含められ、改作が施されている。波郷は昭和十年前後、横光の句会「十日会」に入りし、みずからは同人誌「鶴」を主宰していた。当時より横光の文体改革運動に影響を受け、横光を師として新興俳句の運動に参加した。句集「鶴の眼」（沙羅書店、一九三九・八）の序文は横光が執筆している。

今号は横光利一の追悼特集として、遺作一篇のほか、主に小林秀雄周辺の旧『文学界』同人、横光の家族と友人の回想文が寄せられている。横光の遺作「無題」は、疎開地で貧苦にあえぐ主人公「私」の生活を描く。「周辺の不平を弾き返している最中」という言葉があり、民主主義文学陣営から「文壇の戦犯」と非難され文学者としての戦争責任を追及されていた時期を描いた作品であると考えられる。

小林秀雄「横光さんのこと」は、横光の死の原因を病気というより内面的な苦悩に求めている。「機械」の発表以後、横光の過敏な感性和不安な自意識が内攻したことを指摘し、横光はこの内的な分裂の苦しさから逃れることができなかつた、と小林は論ずる。河上徹太郎「別れの辞」は、とくに『旅愁』に注目し、閉塞した日本文学における近代化のアポリアを、作品を通して思考した横光の姿勢を評価した。また菊池寛「横光君について」は、『文藝春秋』時代のことから再婚の話まで、横光との交友関係を振り返っ

た一文。とくに、小里文子が横光の小説「計算した女」と菊池自身の小説「噂の発生」のモデル人物であることを紹介している点が興味深い。横光ばかりでなく『文学界』同人の小林と河上、またそのオーナーであった菊池も戦後、文学者としての戦争責任を問われていた。彼らを執筆陣の中心に迎えたところに、出発時の本誌の立ち位置が窺われる。

また、横光のヨーロッパ体験について証言する記事が掲載されている点も注目される。大阪毎日新聞社の社員だった城戸又一は、パリ特派員として現地で横光と交友関係をもった。城戸によると、横光は西欧旅行に際して、ヨーロッパ文化を吸収するというより、自身の有する思想と文化を守ろうとしており、その自己防衛的な姿勢が印象に残ったという。この証言は『旅愁』の主人公矢代と久慈の対立を考える上で示唆的であろう。高浜虚子「パリに同行して」は、欧州旅行中の乗船経験を語り、船上の俳句会に絶えず顔を出す横光の姿を描く。ロンドンでペンクラブに招待された際、虚子は横光と再会することになったという。岡本太郎「巴里と横光氏」では、パリで同行した横光に岡本が違和感を覚えたことについて書かれている。ひとつは、パリにはリリズム（叙情精神）がない、と横光が発言したこと。いまひとつは、ダダイズムの祖・ツァラと面会した際、労働者の攻勢やピカソの左傾を話題にしたあと、パリにはリアリズムがないと横光が発言したことである。これらの証言は、西欧と日本という二項対立的な図式が、欧州旅行を機に横光のなかで形成されていったことを示唆している。

その他、横光の妻千代子による「四時十三分・臨終記」、横光の弟子で「鶴」同人の石坂友二による「懐かしき大樹」、かつて『文

藝時代」に加わつた八木義徳による「慕情無限、彼女の修業時代から横光を知る中里恒子の「横光利一の最初と最後」、息子佑典による「私の父」が掲載されている。末尾に大輪好輝による横光の略年譜を付す。

(呉海洋／こ かいよう)

■第二号（一九四八年七月）

今号に掲載された評論・エッセイは十篇。執筆陣には、河上徹太郎・豊島与志雄・舟橋聖一ら旧『文学界』グループの他に、野間宏・加藤周一・中村真一郎ら戦後派作家が加わっている。また、「横光利一賞規定」が掲載され、「明日の文学に新生面を拓き真に新しき文学の名に価する新人の創作一篇」に対して、毎年一回同人雑誌、一般雑誌、単行本の中から選出されることが示されている。賞金は五万円。選考委員は川端康成、小林秀雄、河上徹太郎、林美美子、橋本英吉、中山義秀、井伏鱒二、豊島与志雄の八人である。

河上徹太郎「実存の文学」（『近代文学論』創元社、一九四九・一一）は、若い作家の登場を含めた同時代文学の実存主義的傾向について述べた上で、その表現に対する不満を表明する。森有正の論をもとにパスカルの実存主義的主張を辿り、理論の問題に留まるデカルトとは異なる「性格と表情を備へた近代小説の人間像」の可能性をそこに見出している。パスカルの方法を作品の形に実現した現代作家としてブルーストの名を挙げ、その影響下にある中村真一郎の「死の影の下に」（『高原』一九四六・八〜四七・九）を取り上げるが、そこに「内的持続の要素」がないことを批判する。

長与善郎「文壇近況の一展望——デカダンスのことなど」（『太宰治論集 同時代篇 第4巻』ゆまに書房、一九九二・一〇）に抄録）は、同時代の文壇の状況について、梅崎春生「日の果て」（『思索』一九四七・九）、野間宏「顔の中の赤い月」（『綜合文化』一九四七・八）、太宰治「斜陽」（『新潮』一九四七・七〜一〇）を取り上げながら論じている。梅崎については、戦争の描き方を評価しつつも、「面白さ」を過剰に重視する大衆作家らに近いことを批判。野間に対しては、思想を持った作家である点で、従来の日本文壇にはない存在であると期待を寄せる。太宰については、厭世観に対するアンチテーゼを持ち込まない点について論じ、自殺への志向を憂慮する。寺田透「永井・志賀・谷崎諸家の作風について」（改題）小説と時間——永井・谷崎・志賀諸家の作風について、「作家私論」改造社、一九四九・六）は、三大家を「趣味の人として、おのれを失わなかつたほとんど最後の人人である」とし、三者の「趣味の問題」について論じる。荷風については風俗に身を委ねるだけの姿勢、志賀については作品の物質化とそれによる作中人物の意志のなさを批判する。他方、谷崎については、「細雪」を取り上げ、作品の中に自己の気質を歌いあげていること、純粋な感情や習慣の美しさを作品に造形していることを称賛する。

清水幾太郎「戦後ジャーナリズムへの反省」は、戦後のジャーナリズムが民主主義の紹介と賛美に終始していることを取り上げ、そこに見られる問題について論じる。具体的には書き手の問題、難読な文章の問題、匿名批評などの問題を列挙した上で、ジャーナリズムの本来の機能に至るための、日常の生活や国民の心理に浸透させる技術と精神の欠如を指摘する。豊島与志雄「今日の條

件」(『文学以前』河出書房、一九五二・三)は、冒頭でユートピアとしての理想的社会像を述べた後、理想へ到達するための文学のあり方について論じる。豊島は評論にもまして小説に多くの可能性を認め、現実や権力観念に対して反抗し、それらの障壁を突き破る、将来への志向を持った文学を希求する。

野間宏「小小説論」(改題「小説論(Ⅰ)」、『文学の探究』未來社、一九五二・九)は、小説家による作中の人物の取り扱い方の歴史をトルストイやゾラなどを引きながら辿った上で、戦争が「人間の条件」を大きく変えた現代においては、以前とは異なる条件に留まるものだとし、その実験性の克服を求め、時代によって変動する人間に対応する小説論を常に作家が持つべきであることを主張する。

室生犀星「納屋の前」(随筆『泥孔雀』沙羅書房、一九四九・八)は、戦中から戦後にかけての生活における、掏摸や強盗、野犬、東京と信州などについての随想。加藤周一「一枚のドウラン」(改題「理性」、市原豊太編『人生に関する五十八章』河出書房、一九五〇・一二に一部収録)は、戦争が始まりつつある中で出会った一枚のカロリユス・デュランの絵画についての文章。そこに描かれた女性と海との間の空間性にデカルトの「方法序説」に通ずるものを見出し、理性のありかた、精神の自由について論じる。ジャーナリストの阿部真之助による「勝負師菊池寛」は、様々なエピソードとともに菊池の勝負事を好む性格について紹介し、文藝春秋社の社員たちとの関係性の良さも、その勝負師としての運命論的側面によるものだろうと推測している。安井曾太

郎「白樺と焼岳」は昭和十六年に描き始めたという口絵の解説。中村真一郎「想出の夜明け」は、詩篇「炎」(中村真一郎詩集)書肆ユリイカ、一九五〇・九)の一部。斎藤茂吉「初夏新作」は、のちに「梅雨」と改題され、『つきかけ』(岩波書店、一九五四・二)に収録された。その際、「ジンメルの貨幣の哲学増刷しき人は模索の真なかにありて」の句は、「雑歌控」として収録されている。

今号に掲載された小説作品は四篇。船山馨「化石の生」の所収は未詳。舟橋聖一「夫人と少婢」は『無風』(改造社、一九四八・九)に収録。丹羽文雄「マロリエの並木」は、単行本「告白」(六興出版部、一九四九・三)に収められた後、『丹羽文雄文学全集 第一八巻』(講談社、一九七四・一二)等に収録されている。

ここでは、佐多稲子「顔」(『佐多稲子作品集 第七巻』、筑摩書房、一九五九・七)、『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八・三)に注目したい。板垣直子は本作発表後、「女流作家の方を見ると、思想性からも造的な見地からも、みるべき新人は皆無であるのみならず、佐多稲子がわかに「顔」のような左翼の関心をもつ失敗作を発表したことは、星が一つ地に落ちたように思わせる」と批判的な言及を行なっている。主人公に注目すると、人物設定に中野重治の影を見出すことができる。この人物を戯画化した形で作品に登場させていることは、佐多と中野の関係を考える上で示唆的である。また、この人物は労農党に属していたとされる。中野とは一致しない点であるが、労農党、あるいは社会党に属する人物は、佐多の他の戦後作品にも頻りに登場する。共産党との関係が重要なモチーフとなっている佐多の作品史において、

これらの要素を持つ本作の位置づけは今後の課題として残されている。

(都田康仁／みやこだ やすひと)

■第三号（一九四九年一月）

新年号となる第三号では「創作特輯」として小説八篇、詩二篇を掲載している。今号掲載の詩篇は、『四季』派の詩人平井彌太郎による「朝の掌／夕化粧」と、旧タグイスト詩人であり、『歷程』同人高橋新吉の「しづけさ」である。

巻頭を飾る川端康成のほか、佐藤春夫、中山義秀、阿部知二などが名を連ね、創刊号にて追悼特集が組まれた横光利一と時代をもにした旧『文学界』周辺の作家の寄稿が目立つ。川端「かけす」・「夏と冬」（『哀愁』細川新書、一九四九・一二）はそれぞれ三頁ほどの紙幅ながらも、家族の血縁または婚姻関係を主題とする作品であり、均質のとれた構成のもと日本的な風俗慣習を土台に（近代）性を写し撮ったものと作家自らが定義する掌編小説の一篇に数えられよう。

中山義秀「沈黙の塔」は今号を含め本誌に四回（通巻3・5・6・8号）にわたって連載されたのち、「青春の塔」（『純潔』東方社、一九五五・一一）と題を改めた。小説のタイトルにある「塔」は、中山がかつて横光らと立ち上げた同人誌『塔』から採られている。小説自体も早稲田時代の中山の周辺を描いたモデル小説として読まれる内容のものである。連載初回の末尾では、登場人物の伊丹行光が横光利一、折瀬三英が佐藤一英、松代周造が中山自身に対応することが作者によって明かされている。佐藤一英（一

八九九～一九七九）は愛知出身の詩人。『塔』のほか、春山行夫らと詩誌『青騎士』を主宰した。一九三〇年代には、『新韻律詩抄』

（小山書店、一九三五・九）などの詩作・詩論のほか太平記、平家物語の解釈本も上梓したが、戦時下には『魂の楯』（鶴書房、一九四二・三）、『日本美の再建』（湯川弘文社、一九四三・四）など、古典文化と宗教が混淆した独自の美学を説く著書も手がけている。

佐藤春夫「永く相おもふ」或は「ゆめみるひと」（『観潮楼附近』三笠書房、一九五七・五）は、「わたくし」が慶応義塾大学時代に教えを乞うた与謝野寛（鉄幹）の妻・晶子から鉄幹の遺品である陶印を二種類譲り受けたうちの一つを紛失したために覚えのある陶印を二種類譲り受けたという内容の小説。この知人が堀口大學であり、「わたくし」も佐藤自身と読んで差し支えない随筆風の筆致をとる。与謝野夫妻、堀口のほか森鷗外や山川登美子の名が挙げられており、『明星』『スバル』を中心とした三田にまつわる文学者の交友の記録としても参照に値しよう。なお、表題の「永く相おもふ」、「ゆめみるひと」は鉄幹から佐藤に委譲された陶印の刻字であり、後者は鷗外の手によるものであるとされる。

また、横光利一の弟子となり、のちにプロレタリア作家へと転じた橋本英吉が「地獄極楽」を掲載するなど、横光追悼の流れを汲む創作特輯であることが窺える。そのほか、早くに母を亡くした大学生の娘と父の関係を描いた上林暁「約束の家」（『開運の願』改造社、一九四九・三）や、絵の名手であった上人をめぐる逸話と戦後の知識人を取り巻く世相を描いた阿部知二「秋草談」が掲載されている。

ペテランのみならず北原武夫「眞知子」や佐竹龍夫の「壺中の

秋」〔「ひろぼにや」一九四九・二〕など中堅作家の作品も掲載されているが、それらにもまして注目される掲載作は、文壇登場後間もない藤原審爾の中篇「奔命の章」である。習作期の藤原を知る井伏鱒二によれば、岡山にて同人誌『文学祭』に発表した「煉獄の曲」が河盛好蔵の目に留まり、「新潮」など中央文壇進出を果たした藤原は、代表作『秋津温泉』（大日本雄弁会講談社、一九四八・九）を発表した後、「煉獄の曲」に手を加えて「奔命の章」と改題し『改造文藝』に寄稿した¹⁰。堀辰雄の影響を色濃く受けた新世代の作家として評価されたこの時期の藤原は、本作においても堀のサナトリウム小説と近い設定を採用している。ただし、室生犀星の（ふるさと）に関する詩のオマージュや、作品序盤から多用されるロマン主義的表現が終盤において決壊する過程を描いている点は、注目されるべきであろう。のちに娯楽性に富んだ小説を多く手がけたことで知られるこの作家がどのように先行作品から表現の方法を獲得したのかについては、とりわけ堀作品の後進世代に対する影響を考える上でも重要である。

（西田正慶／しだ まさよし）

■第四号（一九四九年五月）

今号の巻頭には、渡邊慧の「特殊を通じて普遍へ——廿世紀の科学と芸術の性格の一側面に関して」が掲載されている。一九世紀には事実を客観的に描写しようとした結果、逆に事実から離れてしまふという現象が生じたと言語、二〇世紀の科学と芸術は、特殊性を通してより高い普遍的なものを見つけようとする¹¹と述べる。大学在学中、寺田寅彦に学んだ物理学者渡邊慧は戦後、鶴見俊輔、

丸山眞男、都留重人、武谷三男、武田清子と共に「思想の科学研究会」を結成したことが知られる。その同人である武谷三男は、『世界文化』にも参加し、同誌編集長であった水島治男との繋がりが見られる。水島は、戦前期に本誌の母体である雑誌『改造』の編集長を務めていた。本誌と渡邊慧の接点は、こうした人脈から窺われる。

竹山道雄「国籍」〔「見て感じて考える」創文社、一九五三・四〕は、一九三九年、自分を養子にしてくれと強請るユダヤ人と遭遇したことを振り返り、ナチズムに迫害されて日本に滞在したユダヤ人との思い出を記す。小林秀雄「文化について」〔「小林秀雄全集」第六巻、創元社、一九五〇・一二〕は、文化という言葉が翻訳された際にニュアンス的な間違いがあり、その結果、この言葉は実際の語感が知られないままに多くの人に誤用されていることを指摘、現代では批評というものの考えが不徹底であり、批評のために批評するという中途半端な批評が数多く存在すると語る。中野好夫「大衆小説雑感」〔「文学評論集」第三巻、東京大学、一八五二〕は当時の大衆小説が千篇一律で、春本的なものが殆どであると難じつつ、これは戦争に負けた後の日本社会の心理状態の一部分を表す重要な資料であると述べる。曾我廼家五郎の喜劇の大衆性を肯定的に評価した上で、同様に大衆性を持つ吉川英治、菊池寛、吉屋信子の作品を称賛し、直木三十五や大佛次郎が書いた作品は大衆性が足りないと指摘する。吉屋の「良人の貞操」を取り上げて会話文の後にある注釈文を引用し、大衆小説の絶対条件は「ワカリヨサ」であることを述べる。

内田百閒「隨筆二題」は、「雀」〔「隨筆億劫帳」河出書房、一九

五一・四)と「目白落鳥」(同)の二作からなる。前者は一九四五年二月二六日の出来事を回想しながら空襲体験を記し、最後に二・二六事件を想起する。後者は鳥類の観察日記の趣がある。高見順「仰臥雑談」(改題「方法と個性の精神について」)、「私の文学観」社会思想研究会出版部、一九五五・一〇)は、文学的リアリティを創造しようとする横光利一の新しさを肯定し、強い精神こそが文学の新しい条件であると主張する。

掲載された詩作品は、草野心平の「おまへの未来はギラギラ光るか」(『天 草野心平詩集』新潮社、一九五一・九)「未来のはてから振りかえると」(未詳)、及び大輪光輝「遠い浅草の歌」(未詳)の三作。草野は一九四八年八月、単身福島から上京し、翌年八月に、練馬下石神井に居を構えた。「おまへの未来はギラギラ光るか」はこの間に作られたと見られる作品である。

今号は、第一回横光利一賞当選作品として、大岡昇平「俘虜記」(『文学界』一九四八・二↓改題「捉まるまで」)、「俘虜記」創元社、一九四八・一二)を掲載している。フィリピンで米軍の捕虜になった体験をもとにした、戦後文学の代表作である。賞を受けた大岡は、「横光先生と私」において横光賞を受賞した喜びを語る。詮衡委員会は四九年一月九日に開催。「俘虜記」への授賞は満場一致で決したという。詮衡委員を務めた小林秀雄・川端康成・林芙美子・橋本英吉・河上徹太郎・井伏鱒二・豊島与志雄・中山義秀が選評を記している。今号の小説欄に掲載する創作は六篇。大岡「俘虜記」のほか、井上友一郎「誘蛾燈」(『美貌と白痴』文藝春秋新社、一九四九・一〇)、横光利一賞の詮衡委員のひとりである井伏鱒二の「普門院さん」(『試験監督』文藝春秋新社、一九四九・九)、佐

竹龍夫の「黯い精霊」。井伏と同じく横光賞詮衡委員であった豊島与志雄の「憑きもの」(『豊島与志雄著作集』第五卷、未来社、一九六六・一一)は、お酒好きな夫婦を中心にし、夫の視点から展開する作品である。

豊田三郎「名人位」(所収未詳)は、将棋好きな豊田が一九四〇年の第二期名人位戦第三局をモデルにした作品である。「日日新聞」(一九四〇・六・二五〜二六)をひもとけば、豊田がこの将棋対戦についての座談会に参加したことが分かる。対戦を観戦した豊田が書いた「名人位」では、対局の時間が明確に提示され、対決する際の様子、雰囲気などが観戦記のように詳細に書かれている。観戦記者が書く将棋観戦記には、必ずしも観戦記者自身は登場しないが、本作品は観戦記者の身辺に起こった出来事を含めた形で語られた作品である。なお、前号でも小説作品を掲載した佐竹龍夫は、広津和郎に親炙した小説家である。広津は戦時『文学界』において小林秀雄と接点を有し、『改造』の編輯に従事した田久弥とも親しい。佐竹が本誌に寄稿した背景には、こうした人脈があると見られる。(張蔡粵縁/ちよう さいえつえん)

■通巻第五号(第一巻第一号、一九四九年七月)

前号までは季刊であったが、今号より月刊へと刊行形態を変更。表紙に「創刊号」との記載があるのはそのためである。その他「言論」改題」との表記も見られる。

今号より清水崑「現代名作漫画評」の連載が始まっている。同時代の小説作品を、あらすじを紹介しながらイラストで図解したもの。初回は石川達三の「望みなき」に非ず(読売新聞社、一九四

七)を素材としている。清水は政治漫画や火野葦平「河童」(早川書房、一九五三)に代表される「かっぱ絵」で知られる漫画家で、本誌執筆陣との繋がりも深い。中山義秀との関わりは特に深く、清水はエッセイ「酒友酔態」(筆をかっいで)創元社、一九五一・一一)において、「十五年来の酒友である。お互いの独身の頃はよく一緒に飲み過ぎたり、沈没したり、旅行先で帰りの汽車賃に窮したりした」と回想している。同エッセイ内では中山のほか永井龍男や井伏鱒二、小林秀雄らの名前も挙げられており、ここに清水の文壇との関わりを見ることが出来る。

小泉信三「近事三題」は、「孤独の精神」(今の日本)慶友社、一九五〇・八)「ホビイ」(同書↓「小泉信三エッセイ選」慶應義塾大学出版会、二〇一六・一〇)「法隆寺金堂の炎焼」(同)の三節からなる。文明国家としての日本人の精神性を批判し、さらにその根幹として同時代の民主主義を批判している。劇作家真船豊による「感動について」は、美しさへの「感動」を題材に、自然と人間の関係を論ずる。真船は「十九世紀の魂の宿命」として現代人が「感動、愛情、尊敬、信仰」を失ってしまったと指摘し、その結果の出来事として前掲の小泉と同様法隆寺の炎焼事件を取り上げ「戦争の比ではない」ほどの大恥であると批判している。法隆寺金堂焼失(一九四九年一月二六日)が戦後の知識人らにとっていかに重大事であったかを物語る。

再出発した本誌が今号において目玉企画として据えたのが、時の首相である吉田茂とその息子吉田健一による親子対談である。司会は河上徹太郎。日本とイギリスの対比を中心に教育や小説、新聞記者に関しての話題が展開されるが、全体を通してそれほど

深く切り込んだ内容にはなっていない。しかし、その中でもマツカーサーの印象についての「偉い人」「親切な人」であるという感想や、中共進出についての「中国が赤化しよう」としまいと中国人は中国人で、中国人の本性は決して変わらないと思う」という発言などからは、吉田茂の政治意識の一端を読み取ることが可能である。

今号より、匿名時評二篇の連作が始まっている。「土星びとの言葉」は、吉田茂のいわゆる白足袋問題を中心に、読者の「奇形な発達」と作家の「生活の逼迫」を問題視するとともに文化人の平和擁護運動への批判を展開するなど、同時代の文壇的状况を批判的に概観している。ここに見られる同時代の政治と文化の關係に対する批判意識は前掲の小泉や真船らと共通するものであり、本誌に通底する意識を垣間見ることが出来るだろう。「智・情・意」では、小説と市民文化の關係、文学と宗教の關係、日本浪曼派運動に関する問題が批判的に考察される。いずれも文学の在り方を文化的事象との関連の中で批判的に論じたものであり、同時代の文壇的状况への批判意識が見て取れる。

今号のもう一つの大型企画が、座談会「作家と読者の座談会 小説談義」である。作家として井上友一郎・林芙美子・舟橋聖一の三者が、読者としてジャーナリストの渡邊紳一郎・石川欣一、実業家の澁澤秀雄の三者が登壇し、同時代文学の現状について議論を交わす。前半は私小説を中心に小説における「社会智」の有無や、作家と読者大衆の意識の乖離など戦後の小説の在り方に関する議論が展開されている。後半は文学の海外輸出が主な争点となっているが、「清貧ヒューマニズム」に代表されるような「文学の伝

統」によって海外における日本文学の流通が阻まれているという結論が出されている。

小説欄掲載の作品は三作で、うち一篇は連載作である中山義秀「沈黙の塔」。林芙美子「松葉牡丹」は年老いた男性である志村歳行と若く活発な女性とる子による戦後の放浪を描いた作品であり、「古い」や「戦後」といった観点を通した林のデカダンスが表れた作品である。選集「林芙美子文庫」（新潮社、一九五〇）の一作に採られており、林自身が後期の代表作の一つと認めていることがうかがえるが、従来の研究ではあまり注目されていない。大岡昇平「俘虜の季節」は「俘虜記」連作の一篇に位置付けられる作品で、単行本「俘虜記」（創元社、一九五二・一二）に収録されてからは「季節」と改題されている。その他訳詩として佐藤春夫「蕩々詩抄 二編」があり、張籍「短歌行」より「青春の悲しみ」、陶淵明「読山海経」より「三青鳥に言伝て」の二篇が掲載されている。これらはいずれも『佐藤春夫全集』（第一巻、講談社、一九六六）以外への収録は見られない。（長澤拓哉／ながさわ たくや）

■通巻第六号（第一巻第二号、一九四九年八月）

前号に引き続き、巻頭には清水崑「現代名作漫画評」が配されている。今号の対象作品は四八年から四四年まで『小説新潮』に断続的に掲載されていた石坂洋次郎の「石中先生行状記」。六枚の絵に寸評が付されている。

鈴木文史朗「病根は機会便乗主義」は、赤化教育を受けて帰国したソ連からの引揚者の言動を端緒に、日本人の大勢順応的な態度を機会便乗主義として批判する文章。ジャーナリストである鈴木

木は戦後、電通のバックアップを受けた文化人クラブ「世界文化研究会」に出入りしていた。総合雑誌「世界文化」編集長の水島治男を中心とする同会は、『文学界』にゆかりのある川端康成・豊島与志雄ら日本ペンクラブの幹部とのつながりを持っており、鈴木はその人脈から本誌への執筆に至ったと見られる。辰野隆「老若問答」（改題「世相について」、『老若問答』要書房、一九五〇・一二）の論旨は、前掲の鈴木「病根は機会便乗主義」と重なる。共産主義思想を吹き込まれた引揚者が当時の社会問題となっていたことが窺える。著者の辰野は再建された日本ペンクラブの副会長を前年まで務めていた。このことから同組織と本誌との結びつきが見える。

慶應義塾大学で開かれていた公開講座「近代日本文学の展望」（『近代日本文学の展望』大日本雄弁会講談社、一九五〇・七）の第四回目を記録した佐藤春夫の「自然主義功罪論」は、日本における自然主義運動を「非文学的文学」と呼び、その特徴を旧来の文学の詩美を破壊する「新しさ」に見出すと皮肉るとともに、同運動が何も創造しなかった点を繰り返し返し難じている。佐藤の自然主義運動への反感が表れている評論である。

河上徹太郎「音楽の近代性に関する一考察」は音楽評論。十八世紀から二十世紀までのヨーロッパ音楽の特徴と変遷をそれぞれの時間性から整理したうえで、音楽というジャンルには他の芸術分野のようなルネサンスというコペルニクスの転回の経験が欠けていたと指摘し、二十世紀の音楽は十九世紀の革新性を放棄して十八世紀の古典主義に戻るだろうという予測を立てている。

今号のハイライトは、井上友一郎と北原武夫との対決座談会「モ

デル・虚構・人生」であろう。井上が「絶壁」（『改造』一九四九・五）で北原とその妻・宇野千代をモデルに事実無根の内容を書き立てたことをめぐり、作家とモデルが対面して応酬を繰り広げた。「文学上」「実生活上」の問題で平行線を辿る両者の言い分に、司会の河盛好蔵は、北原を擁護する姿勢を見せつつ、作家のゴシップを煽るジャーナリズムとその背後にいる読者の恐ろしさを述べて二人の対立を調停しようとしている。

匿名時評「智・情・意」では、批評という語や当時運行が始まった象列車に対する意見が述べられている。とりわけ注目すべきは「意」の段で行われた野間宏批判である。匿名子は野間の思想的な弱さを看破し、彼の共産党への遠慮を糾弾している。もうひとつの匿名時評「土星びとの言葉」では、主に第二次大戦後の左右の対立、敗戦後の出版インフレによる作家とジャーナリズムの関係性、吉田満の「小説戦艦大和」（『サロン』一九四九・六）をめぐる作家・批評家の態度の変容という三つの事柄が粗上に載せられている。敗戦の前後で人々の変化が見られないことを批判する論旨は、鈴木や辰野の評論のそれとも重なる。

広津和郎の随筆「熱海にて」（未収）は、中村武羅夫への追悼文。編集者としての中村の功績を、大正文学の育成という点から高く評価する。福島慶子の「巴里の芸術家たち」（『巴里の芸術家たち』創芸社、一九五〇・八）は、自身のバリ在住時の暮らしを振り返ったエッセイ。著者は、美術評論家・美術品コレクターである福島繁太郎の妻でありエッセイストである。梶井基次郎の「器楽的幻覚」（『近代風景』一九二八・五）に登場するピアニストとして知られるアンリ・ジル＝マルシエックスや画家リュシアン・

シモンを中心に、内外の著名な芸術家・文化人たちの交流について語る。

「涼風閑談」は、劇壇の中心人物であった久保田万太郎・千田是也・真船豊による鼎談。文学座の久保田・真船と俳優座の千田が、なるべく芝居以外の話をするようにという記者の要請のもと、七本のトピックについて話し合ったもので、主に久保田・真船の主導で会話が進んでいく。企画側の制約はあったものの、演劇に対する三者それぞれの見方も垣間見える。

今号の小説欄掲載の創作は三篇。うち一篇は連載が続いている中山義秀の「沈黙の塔」、残り二篇は志賀直哉と田村泰次郎の作品である。志賀の「秋風」は、父娘二人の会話からなる戯曲風の作品。田村泰次郎の「雨の夜景」は、戦中から続く私小説的な小説群「曾根平吉」ものに分類される一篇。同系列の小説には、作品集「雁かへる」（大日本雄弁会講談社、一九四九・九）に収録されているものもあるが、本作は単行本未収。「肉体文学」の旗手として過剰な仕事量にあえぐ当時の著者自身の状況と心情、および水島治男・立野信之・小松清ら日本ペンクラブ再建の中心を担った人物たちとの交遊を描くモデル小説である。なお、ここに登場する水島の存在は、本誌の創刊・刊行においても一つの基盤となっていたと見てよい。（河内美帆／かわうち みほ）

■通巻第七号（第一巻第三号、一九四九年九月）

巻頭の清水崑「現代名作漫画評」は、一九四八年から一九五〇年まで『小説新潮』に連載されていた舟橋聖一の『雪夫人絵図』を素材としている。

天野貞祐「わたしの生活から」(「わたしの生涯から」青林書院、一九五三・一〇)では、宗教学者姉崎正治の逝去を新聞で知ったという天野が、姉崎の学恩を追憶しながら、それに影響された自分自身の人生を回顧している。小林珍雄「末世の神学」は、対立的に捉えられているカトリシズムと共産主義の類似性を見出す評論である。この世界が終わり、「主の日」が来たとき、新天地が開かれるというキリスト教の教義に対し、いつか資本主義が去り、プロレタリア独裁をへて遂に共産主義社会が来ると共産主義は提唱する。共産主義の本当の魅力はキリスト教的終末論の余波だと小林は指摘している。

福本和夫「北齋の本質について」は、江戸時代の浮世絵師葛飾北齋を考察する芸術評論である。福本によれば、北齋が「生産者の町人」の立場にたつのは、北齋自らの庶民的な性格の自覚及び、新興庶民芸術の闘将として貴族武士文人の芸術とたたかい、近世日本美術革命を遂行しようとする根本理念が原因である。その上で、福本は、北齋の百姓の本質は「田舎もの江戶」育ちに由来するという藤森成吉論を強く批判している。周知のように、福本はかつて日本共産党の指導者であり、また浮世絵とフランス印象派の比較研究のパイオニアでもある。一九四八年四月、福本の提案と朝日新聞社の後援によって北齋百年祭記念が開催され、世界的に影響を与えた。ちなみに、日本社会党委員長・元総理大臣片山哲が「朝日新聞」(一九五〇・一〇・一八)に掲載した随想「古い本をよみ返す」は、北齋とクールベに言及しており、福本「北齋と印象派の人々」(彰考書院、一九四七・一二)を暗に参照していると考えられる。福本の北齋論は、著作集第五巻『葛飾北齋論』

(こぶし書房、二〇〇八・二)に収録されているが、本作は単行本未収。

時の人であった加賀山之雄が、「下山総裁の死」と題する文章を今号に掲載している。一九四九年七月六日、国有鉄道の初代総裁下山定則が轢死体で発見された(下山事件)。副総裁の加賀山は、その前後より国鉄の人員過剰が議題となるなかで、定員法の実施を検討し、国鉄を再建しようとしていたという。のちに松本清張は、下山事件はアメリカ軍部の謀殺であると主張したが、加賀山はそれが組合内の先鋭分子による謀殺だと主張する。本誌刊行直後の九月、加賀山は国鉄総裁に就任している。

特集企画「歌舞伎の行方」には、六代目尾上菊五郎への追悼文が寄稿されている。坂東寅助「六代目の死とこの後」は、教師として、俳優としての六代目の功績を讃える一方、最大の支柱であった六代目を失う歌舞伎界の傾斜を憂っている。尾上九朗右衛門「父の遺産」は、六代目の長男として父の臨終を追憶し、歌舞伎を時代感覚・時代精神に近づけようとした六代目の遺志を語る一文。辰野隆・荒垣秀雄・高田保の鼎談「毒舌薬舌」においても、歌舞伎の話題が続く。劇作家の高田は、六代目の素質を活かすものが日本に存在しないという不幸を嘆き、「外国へゆかない人間でありながら世界性を身につけてたのは六代目だ」と高く評価し、立派な台本を書ける作家がいけない限り、歌舞伎の命脈は尽きると指摘している。高田は先に挙げた福本と同じように戦前期に検査された経験を有するが、転向してプロレタリア劇壇から離れた過去を持つ。一九四一年に改造社の肝煎りと関東軍の招聘で、高田は、山本実彦(改造社社長)・川端康成・火野葦平らとともに旧満洲国

を講演行脚したこともある。⁽¹⁶⁾ その経緯から高田が本誌に登場したと考えられる。

匿名時評「土星びとの言葉」では、主にノンフィクション戦記が流行する原因とその致命傷について語られている。フィクションとしての戦記の書き手としては、梅崎春生、野間宏、大日向葵、大岡昇平の名が挙げられる。注記しておけば、大日向は一九四二年にサイパンで米軍捕虜となり、捕虜収容所での体験を、『マッコイ病院』（講談社、一九四七・九）として発表した作家。この小説はのちに『玉碎の島サイパンから生きて還る』（婦人生活社、一九七三・一）と改題され、本名の吉田旬^{おと}で再刊された。右の四者に對して現在では、敗戦に関する「真実」を公平に知りたいたいという国民の声を受けて、作戦全体を見透かしたものが受けているが、旧左翼文学の暴露小説と同じく素材の見方を一元化し、イデオロギーを操りやすい点が致命傷だと指摘している。いわゆる「赤い引揚者」に言及しつつ日本の国民性を論じ、平事件と下山事件をファッショ精神の復活と見る。もう一篇の匿名時評「智・情・意」は、戦後の服装改良や作家がデビューする年齢について語っている。今号の創作欄には、小説三篇と戯曲一篇が掲載されている。小説のうち一篇は、前号より話題とされた井上友一郎のモデル小説「絶壁」（改造 一九四九・五）の続編「続絶壁」である。両作は単行本「絶壁」（改造社、一九四九・一〇）に収録されている。「山の音」は、戦後の川端康成の代表作『山の音』（筑摩書房、一九五四・四）の第一章。『千羽鶴』（筑摩書房、一九五二・二）に初収録されている。舟橋聖一の「秋扇子」は、中森と二人の情婦、伊栄子と陸軍大将の未亡人の関係を描く作品である。

真船豊の「猿蟹合戦」（四幕物）は、本誌に載せられた唯一の戯曲作品であり、一九五〇年六月に俳優座で千田是也の演出によって上演された。⁽¹⁷⁾ 真船は早大英文科在学中に社会主義思想を学び、一九三九年四月に満洲・北支旅行以来再三にわたって中国へ旅行し、敗戦後四五年一二月に引揚帰国した。⁽¹⁸⁾ 本曲は、自由主義者と自称する薬学博士・甘野賢行を軸に芝居が展開され、占領下で家庭秩序が崩壊した日本人の生活を諷刺する道化芝居である。注目したいのは、ハルビンから引揚げた「北満浪人」、賢行の弟・甘野宗時という人物が真船自身の経験に基づいて造形されたことである。なお、一九三〇年代に左翼がかかる赤い芝居として「猿から貰った柿の種」が上演されたこともあるが、戦後間もなく道化芝居を「猿蟹合戦」と題した真船の意図が興味深い。⁽¹⁹⁾

（霍思静／かくしせい）

■通巻第八号（第一巻第四号、一九四九年一〇月）

今号の小説欄掲載の創作は四篇。中山義秀の連載「沈黙の塔」、火野葦平の「花と罪」（『追放者』創元社、一九五一・一）、および横光利一の遺稿「姉弟」と「火」（『横光利一全集』第四巻、改造社、一九四九・一）である。川端康成による解説「横光君の未発表作品について」（『川端康成全集』第一九巻、新潮社、一九七四）を付す。川端の一文では、まず遺稿を入手した経緯が紹介され、またそれぞれ作品成立当時の作者の動向、他の習作との関係が解説される。川端はとくに「火」（一九一九）を横光の初期の代表作と称賛し、「性的に終始潔癖であった」横光の性格が作品を公表しなかつた原因であると指摘する。

「火」は横光の習作期に著された、母の不倫に対する子供の内的葛藤を語る作品である。横光研究では、作家の実体験に基づく「私小説」的作品として扱われることが多い。²⁰⁾一方で、作品における感覚的表現に着目すると、のちに新感覚派の代表となる横光が、この段階ですでに人間の行動をいわゆる「物自体」の視点から描こうとする「感覚」の重要性を意識していたことが窺われる。

特別原稿として掲載されたのは、イギリスの評論家B・ラッセルの「ヨーロッパ文化の将来」である。世界の最善の思想と芸術はそもそも西ヨーロッパの所産であると指摘した上で、それを守るために、平和の重要性を強調している。もし戦争が避けられなければ、軍事的防衛手段を強め、大西洋諸国の協力を急速に増大するように準備を整えておき、国境への侵入を防止することが必要であると主張している。笠信太郎「ジャーナリズムの不安定」〔笠信太郎全集〕第六卷、朝日新聞社、一九六九・五〕では、戦後ジャーナリズムに現れた問題点が二つ指摘されている。一つは、読者の興味本位に偏った報道姿勢ことであり、もう一つは、日本のジャーナリズムに日本人の生活に根ざした「他人の私生活への関心」という伝統があるという問題である。それを解決するには、ジャーナリズムはまず、色々な現実事象を知ることの要求に耳を傾け、その重みを公平に秤量しなければならぬと述べている。

匿名時評「智・情・意」では、戦後文学に革新が見られず、単なる意屈な同じ型の繰り返しに陥っていることが批判されている。また、ソ連からの引揚者に着目し、人間の思想が環境次第で変わりうることを、人間の精神が支配者の意のままに繰られることを問題として提出する。矢内原伊作「記録文学是か非か」は、同時

代に台頭した記録文学に関する架空座談会。記録文学の流行現象や、大岡昇平の「俘虜記」〔『文学界』、一九四八・二〕をめぐり、記録と文学についての見解が提出されている。もう一篇の匿名時評「土星びとの言葉」では、まず外国文学系を主とする教授グループがジャーナリズムの一般文化批評に重宝がられてきたという戦後の現象を指摘した上で批判する。また、下山事件に着目し、警察の捜査のかわりに、作家に事件の推理を命じるのは近頃ジャーナリズムの好む心理的残逆行為であると断じ、それは世道人心を誤る恐れがあると指摘している。

中村光夫「二葉亭と女郎屋——丹羽文雄氏に」〔戦後文学論争上巻〕番町書房、一九七二・一〇〕は、丹羽文雄とのいわゆる風俗小説論争の発端となった一文。丹羽が「小説鼎談」〔『風雪』一九四九・四〕で語った中村批判に反論を加える。二葉亭がロシアで女郎屋を経営しようとした過去をも持つことを強調し、中村がそれを知らずに二葉亭論を書いたのではないかと勘繰る丹羽の言説が、実は二葉亭を「完全に丹羽文雄化した」理解に基づくものに過ぎないと中村は述べている。

室生犀星「堀辰雄に会はざるの記」は、堀辰雄が病気になる前八年間、自分が追分に堀を見舞いに行ったことは一度もない原因を語る。また、小説家としての堀は最も感心されたのは彼の観察力であり、小説に描かれた絵のような景色が現実のある所とびつたりと一致していることは最も肝心なことであると称賛している。

丸岡明「三田派・早稲田派」は、「三田派」と「早稲田派」の対抗関係から戦後文学の展開をたどる。佐藤春夫が提出した「浪漫的自然主義」を三田派文学のマニフェストと見る一方で、正宗白

島が『自然主義盛衰史』（六興出版部、一九二八・一）で提出した論点を早稲田派の新しい自然主義の文学的根柢にすると主張している。また、丹羽文雄VS石坂洋次郎、井上友一郎VS北原武夫、北条誠VS柴田錬三郎の三組六人の作品を「早慶戦」として取り上げ評価する。

政治評論家の馬場恒吾「感激の小説」はユーゴーの小説が自分の人生に及ぼした影響について説く。ユーゴー小説の中心思想は人間が愛に徹底すれば偉いものになると解釈し、そこに描かれた無我無心の状態を人間の本来の姿と認識している。われわれは人間や国家、世界に向かって説教するのは愚かなことだと述べている。河盛好蔵「出版バニック」は、出版事業について河盛に意見を求めるある人への返信である。当時の日本出版業において、出版社が読者の中間層を無視しているのと、書物もまた商品であるという観念が欠けているのと、出来上がった本を売る熱意と努力に乏しいといった問題点を指摘した上で、読者層を広く開拓することと、読者への奉仕を第一位にすることの必要性を強調する。座談会「藤村と大磯」は、高田保を司会として、藤村の三男である島崎翁助、藤村と生涯の交友を結んだ脚本家の天明愛吉、またお菓子屋の斎藤、大内館の女将など大磯と関係のある人、藤村と大磯とのゆかりを中心に、それぞれの藤村への思いを語り合う。

（梁馨蓉／りょう けいよう）

■通巻第九号（第一巻第五号、一九四九年一月）

巻頭には「本誌独占」と題されたノーマン・メイラー「裸者と死者」（山西英一訳「裸者と死者」上巻、改造社、一九四九・一

二）の「第一巻・第一部・波」が配されている。四八年五月にアメリカで出版された本作は、メイラーの体験したレイテ島での戦闘をアノポベイ島という架空の島での出来事として描く。本作はドス・パソスの「カメラアイ」に影響を受けたとされる、それぞれの登場人物の過去を描く「The Time Machine」の手法が特徴的であるが、掲載部分ではまだその場面まで及んでいない。第二次世界大戦文学の金字塔として世界中でベストセラーとなった本作であるが、日本においては上巻出版時に一時「わいせつ文書」として警察から没収処分を受けた。しかし処分はまもなく取り消され、ベストセラーとなった⁽²⁾。山西英一「裸者と死者」については、メイラーの紹介と作品の今日的意義について説明している。

福田恆存「抵抗の精神」は、戦後アメリカから与えられた自由への懐疑から説き起こし、占領批判を匂わせる評論。戦後の自由も戦中の軍部も、共に一般国民の支持を受けていたことを忘れてはならないとし、今日の「紙上抵抗」が一般国民に不安を与えるだけとなっていることを憂えている。戒能通孝「酢豆腐とインテリゲンチヤ」（「インテリゲンチヤ」改造社、一九五〇・六）はインテリゲンチヤの在り方について論じている。インテリゲンチヤの任務とは、専門的知識を大衆に平明な形で見せることだと述べ、今日においてそれは民主主義を憲法だけでなく実践の面でも行うことであると主張している。

高田博厚「天皇」（「フランスと日本と」池田書店、一九五〇・一一）は「特別寄稿」と題されたフランス在住中の著者による政治評論。「天皇」は政治機構によって規定され国民感情と結びつくが、「法皇」は個人と結びついているとした上で、天皇の存在の真

意とは国民個々人の精神の象徴という点にあると論じている。また、先の戦争において「神」の使徒である「法皇」から「神」であった「天皇」に「平和」が命令されていけば、日本は救われたのではないかという夢想を綴っている。生島遼一「日本文学の劣等意識」は、昨今の文壇について述べた評論。規格品ばかりを送り出す文壇にはより長い小説が必要であるとし、文壇の作家たちが「知性の聲」として日本社会を啓蒙していかないがために、「近代人的自覚」を意識できない一般国民には劣等意識が何度も出現してしまい、それが文学にも及ぶと結んでいる。

山之口貌「またはじまった」(『鮪に鯛』原書房、一九六四・一一)は、自身に纏わりつく虫を詠った詩。沖縄生まれの山之口は、戦前に佐藤春夫の知遇を得ている。『思弁の花』(むらさき出版部、一九三八・八)の序文は佐藤と金子光晴が書いており、今号への掲載も佐藤との繋がりによるものであろう。飛車金八「大学はピサの斜塔である」(未詳)は、共産主義への弾圧について述べた文章。思想そのものの弾圧は民主主義の土台にある自由の喪失に繋がると危ぶむ飛車は、大学で人事院規則により共産党支持者が追放される現状にふれながら、それに反対する日本学術会議および大学の運動を紹介している。

小説は四篇。うち一篇は江戸末期の日米関係と料理屋で働くおさちの関わりを描いた井上友二郎「唐人お吉」(『唐人お吉』改造社、一九五〇・一二)の連載第一回である。残り三篇は佐藤春夫、三島由紀夫、井伏鱒二の作品。佐藤の「老残」(『わが小説作法』新潮社、一九五四・八)は戦後の村落と闇市の関係を描く。作品末尾に「附記」として「村の衆」に向けて「これは小説つうもの

で嘘や本当をいいかげんにとんまはしてでかしたものでござす」という説明が書かれているのが特徴的である。三島の「火山の休暇」(『怪物 三島由紀夫小説集』改造社、一九五〇・六)は、火山のある島に滞在する菊田次郎を描く。同じ主人公を配するいわゆる「菊田次郎もの」には、他に「死の鳥」(『改造』一九五一・四)と「旅の墓碑銘」(『新潮』一九五三・六)がある。井伏鱒二「植木鉢」(『井伏鱒二全集』第十三巻、筑摩書房、一九九八・九)は、夫から妻への書簡の体をとった小説である。

(星住優太／ほしずみ ゆうた)

■通巻第一〇号(第一巻第六号、一九四九年二月)

本号に収録されているエッセイ・評論・記事は八篇、創作作品は四篇である。

安倍能成「若き日の読書」(『一リベラリストの言葉』勁草書房、一九五三・五)↓「現代知性全集 第一安倍能成集」日本書房、一九五九・一)は、自分の若き時の読書体験について語るエッセイ。安倍が主に中学時代に影響を受けた作家には、高山樗牛、姉崎正治と幸田露伴、夏目漱石などがあるという。その他に、英語訳と和訳を比較しながら聖書を読んだこと、第一高等学校時代には藤原正らと開催した西洋文学輪読会でシェクスピアやゲーテを読んだこと、岩本禎からの影響でシルラーに接したことが回想されている。

W・チェンバリン「永遠のヨーロッパ」は、世界大戦後の状況においても不変の価値として、ヨーロッパ文明の遺産である文学、音楽、芸術、宗教、哲学を挙げている。これらの文明の遺産が共

産主義の脅威に抵抗し平和なヨーロッパを建設した。なかでも重要なヨーロッパの遺産は、国民と世界的なものを結合したゲーテとシヨパンである。このように論じたチェンバリンは、戦争と全体主義的専制とを生き抜いた二人の作品に、ヨーロッパの未来の自由が存在するとした。ウイリアム・ヘンリー・チェンバリンは、アメリカの歴史家、ジャーナリスト。クリチャン・サイエンス・モニターの特派員としてロシアに滞在し、東京駐在中には『東大陸』、『文化日本』、『公論』などに評論を残している。なお、安倍能成とW・チェンバリンは同時期に、岩波書店『世界』で平和評論を書いている。

正宗白鳥『秋のドライブ』（『正宗白鳥全集』第十一巻、新潮社、一九六八・一）は、哀れな現実から心の慰めになるのは空想であると述べた上、自動車のドライブに空想を移している。空想のドライブで誰を訪問するかは自由であり、「私」は秋晴れの日、ドライブし西洋館に着く。その慰勞会で出会った人々は全員優秀な業績をもつのである。「私」は将棋士と詩について語る最中現実の老いた姿が変わってくる。現実に戻りつつある「私」は空想が早く前に帰家することで随筆は閉じられる。

吉田健一「牧野伸顯」（宰相御曹司貧窮）『文芸春秋新社、一九五四・六』は、表題のとおり牧野伸顯についての評伝的エッセイ。自分の生涯と明治維新以後の日本の発展の歴史が密接であると考えながら、時代と自分の相違を感じていた牧野は、日本の近代史を個人的に捉えたと指摘されている。もともと皇室崇拜に否定的であり、自由主義の巨頭に目された牧野は、日支事変と太平洋戦争期に隠居生活を始め、『文学界』の同人と交流した。その後

没するまでの牧野の足跡を辿る。

政治学者の中村菊男「戦後派の精神分析」は、終戦後の日本人を支配する心理状態が傍観的な他律的な気持ちであり、非自主的なものであると指摘、フロイトのエディプスコンプレックスを日本の国家に応用しつつ、国家を父親コンプレックスの投射と捉え、自主性ではなく天皇という集団長により結ばれていると論ずる。精神分析を政治学に応用する中村の所説は、『政治心理学』（世界書院、一九四九・四）で本格的に展開されており、この評論はその要約である。

戦後日本を代表するコメディアンの中川緑波は、「読書習慣」（未詳）と題して、読書ノートを本誌に公にしている。取り上げられているのは、正宗白鳥『空想の天国』（中央公論社、一九四八・一）、谷崎潤一郎『細雪』（中央公論社、一九四八・一）、宇野浩二『文学的散歩』（新潮社、一九四二・六）、『小説の文章』（創芸社、一九四八）、木下玄太郎『食後の唄』（角川書店、一九四八・一〇）、トルストイ『クロイツェル・ソナタ』（青磁社、一九四八・九）。この中で、宇野浩二については文章が独特であると述べ、『小説の文章』で語られた文章観に共感を示している。緑波は谷崎や玄太郎にも文章に焦点を当てて評価している。

村松梢風「西湖の女子」（未詳）は、中国の綺譚であり、西湖省で劉生と青兒の間での物語を紹介したもの。菊田一夫「愛情白書」（未詳）は、猪俣明子との間の不倫事件に関して、菊田が一九四九年十月一日付で記した訴状を公にしたものである。ここで菊田は、社会的な道徳よりも人間の愛情を重んじるべきであると訴える。そして、猪俣四郎の同居請求と夫権侵害の慰藉料請求が提訴され

た経緯について語る。これら他に、「アメリカ文藝短信」として、アーネスト・ヘミングウェイ、T・S・エリオット、ジョージ・オーエルらの最新作の情報が紹介されている。

里見淳「牽牛花と仔犬」は、主人公晋策の田園での牽牛花を育てるといふ物語である。同じく晋策は、「いとときき女」(別冊文藝春秋)文芸春秋社、一九五六・六)にも登場する。そのほかの船山馨「階段」は、警官での家出少女やその人々に関する物語である。井上友一郎「唐人お吉」の連載は二回目。沈承怡「霧」(鳩の町)時事通信社、一九四九・一二)は、終戦後の日本を中国人の記者の立場で見た物語である。上海出身で聖約翰大学を卒業した沈承怡は、一九四七年以来日本に在住し、中央通信東京特派員として勤務していた。英語で書かれた沈承怡作品のうち、本作は第三作目であり、井上勇により翻訳された。川端康成の「沈承怡君」は、単行本『鳩の町』(時事通信社、一九四九・一二)の序文として収録された。(金善泰/きむ そんて)

■通巻第一一〇号(第二巻第一号、一九五〇年一月)

今号は新春小説特集であり、掲載作は十三篇。舟橋聖一「山のホテルの女客」、小谷剛「遊動園木」については、本誌掲載後の刊本は未詳。その他の作品の所収は以下の通り。尾崎一雄「相模湾産後鯉類図譜」と「アカハタ」(「なめくぢ横丁」中央公論社、一九五〇)、武田泰淳「細菌のいる風景」(「愛と誓い」筑摩書房、一九五三・七)、瀧井孝作「伐り禿山」(「創作代表選集」第六巻、大日本雄弁会講談社、一九五〇)、石川淳「錦木」(「石川淳全集」第三巻、筑摩書房、一九六一)、堀田善衛「被革命者」(「祖国喪失」

文藝春秋新社、一九五二)、久保田万太郎「うしろかげ」(「市井人・うしろかげ」改造社、一九五〇・七)、上林暁「聖書とアドルム」(「聖書とアドルム(自選作品集)」目黒書店、一九五二)、佐多稲子「ゆらぐ根太」(「佐多稲子全集」第五巻、講談社、一九七八)、正宗白鳥「アドルム」(「正宗白鳥全集」第一五巻、福武書店、一九八六)、井上友一郎「唐人お吉」、川端康成「琴を抱いて」(「川端康成全集」第三二巻、新潮社、一九八二)。

ここでは、石川淳「錦木」について見ておこう。同時代評や先行研究は皆無だが、虚構と戯作性という石川における重要な創作上の特徴が認められる。本作は『俊頼髄腦』に収録された古歌「錦木」に基づく虚構であるが、その虚構性は主人公吉六における嘘つきの属性、また人物を構築してきた語り手「わたし」の客観性の欠如からも浮かび上がってくる。また、誇張された吉六の人物造形、吉六の言動及び人物関係のドラマチックな変化によって、作品における戯作性が表出されていると考えられる。

今号に掲載された評論・エッセイは七篇。高見順「二十世紀作家的自覚」(改題「林檎を腐らせることについて」、『人生の周辺』平凡社、一九五七・五)は、高見がN君という戦後派作家(中村真一郎)に宛てた手紙という体裁をとる。高見は、セザンヌが林檎を腐らせたのは、彼の内なる観念と現実的林檎とをなんとか調和させようとして苦心していたからだというポナールの言説を紹介し、それをアブレゲール派の文学と結びつける。また、フランスの現代絵画の複製展において奇妙な嫌悪を感じたことについて述べてつづき、写実画と抽象画、自然主義と形式主義の対立を文壇の動向と絡めて論ずる。

石川達三「尻尾を振る日本人」(『教育社会5(3) 3月号』西荻書店、一九五〇)は、米国情宣伝業者、精神的半米国人と称されるべき日本人を批判する。例として、シールズ野球団の訪問に関する新聞報道や、アメリカの家庭における婦人の地位についての宣伝を取り挙げる。世界中の文明がアメリカに集中しているという宣伝は、世界中の未開地生活がアメリカに集中しているということでもあると石川は言う。一方でアメリカとソ連のどちらにも尻尾を振らない、いわゆる強権に阿諛しない日本人がおり、彼らは米国情宣伝業者にはならないと石川は述べる。

洋画家で歌人の曾宮一念「絵と文・想像と回想」は、長崎や鹿児島をはじめとする九州地方への旅行に関する回想記。九州の風景は地図から想像した通りだったが、当地の言葉の音調は意外であったという。読売ジャイアンツ球団代表の宇野庄治「アメリカ見聞記」は、一九四九年九月末から十一月にかけて行なった、約四十日間のアメリカ視察を記したエッセイである。当地の消費や収入の水準、コロンビア大学における学生生活、新聞編集長の家庭生活などを紹介し、サンフランシスコやニューヨークにおける生活の実態を示しながら日本との比較を行なう。

福田恒存「対面交通(文芸時評Ⅰ)」は、一九四九年十一月から道路交通法の改正により人と車の対面交通が行なわれるようになったことを、「水ぎはだつた主体性の回復」と評する皮肉な言葉から説き起こされる。大部分の新人たちが自己の生活を現実から逃避させるために小説の創作を志願しているのに過ぎないと批判した上で、望みを嘱しうる数少ない作家として、前田純敬・真鍋呉夫・安部公房・島尾敏雄の名を挙げる。

匿名時評「アメリカ文芸航空便」は、ノーマン・メイラーの話題作「裸者と死者」について紹介したエッセイ。作品の創作背景、出版の経緯、ニューヨーク・タイムズの書評、ベスト・セラーズに並べるなど社会における反響、ロンドン・サンデーをはじめとしたイギリス各紙の批評家から受けた攻撃、という様々な事情を紹介している。同じく匿名時評「土星びとの言葉」は、「科学馬鹿コムプレクス」を亜種とする「超国民コムプレクス」と小林秀雄的な「観法」コムプレクスの二種があるとし、対立する両コムプレクスが一緒にあって初めて創造性が生じると語る。さらに、占領管理下に置かれた日本では、そのことが今日の一切の前提になっているのに忘れられ、結局おかしいことをおかしいと感じさせない錯覚が生じていると指摘する。加えて、長尺物の論文を排斥して小説や座談会ばかりを載せている大雑誌の傾向、評論家に勉強とその成果を発表させようとしめないジャーナリズムの動向を批判する。今号では、こうした占領批判が展開されていることが注目されよう。(王雅馨/おう がい)

■通巻第一二号(第二巻第二号、一九五〇年二月)

今号は、P・オルベルグ博士がトーマス・マンに宛てた公開書簡である「トーマス・マンへの公開状——最初のヨーロッパ訪問に際して」を巻頭に配する。スウェーデンのジャーナリストであり社会民主主義者であるオルベルグは、マンのヨーロッパ訪問の際の発言に不満を表す。特にマンが講演の際に言及した、ドイツ語はホームであるという発言を冷笑し、ワイマールでの講演やゲーテ賞と名誉市民の受賞に驚きを表す。東ドイツの言論・結社する

自由が制限される状態でのマンの発言は、支持者を失望させたという。出版社が返信を要求したところ、マンは自身がヨーロッパ訪問後に自身が書いた「旅の報告」(ドイツ語、所収未詳)に参照するよう返答した。「旅の報告」は、マン自身が英訳し、「今日のドイツ」(英語、一九四九・九月二十五日)と改題して「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」に掲載されている。ゲテ生誕二百周年を契機にした旅行での見聞記である。後年、『トーマス・マン日記 一九四九—一九五〇』(森川俊夫他訳、紀伊國屋書店、二〇〇四・一〇)に補遺として収録されている。

前号掲載の高見順「二十世紀作家的自覚」への返信として、中村真一郎のエッセイ「林檎を腐らせ」ながら」が掲載されている。中村は、戦後文学における同人誌の意義を説きつつ、みずからは創作を通して自己認識・自己分析を方法していると述べる。自然主義を中心とした写生的リアリズムは、作者の像を文学作品の中から消す美学的方法であり、作者を精密なカメラにする方法である。林檎を写真の様に模写することは「写真的模写」にすぎない。こう論ずる中村は、高見順の「描写の後ろに寝ていられない」という創作態度をみずからも共有していると認めつつ、「林檎を腐らせ」ながら作品を書き続けると表す。このエッセイの単行本収録は、『文学の創造』(未來社、一九五三・九)、「中村真一郎評論集成」(第一巻、岩波書店、一九八四・六)など。

十八頁にまたがる「共産党首脳と文学者と語る」は、野坂参三をゲストに招く座談会。登壇者は野坂、日本共産党衆議院議員の谷口善太郎、文化部長を務めた大村英之助の他、宇野浩二・豊島与志雄・石川達三・高田保。日本の文藝と政界とが両立しないこ

とが話題となり、プロレタリア文学で扱う対象も労働者に留まるのではなく、日本人全体に拡大する必要があることが語られている。地下活動から正常化し、党の活動として文藝の分野に参与した共産党には、新しい左翼文学の創出が期待されると述べられる。

長谷川幸雄による「アメリカ文藝展望車——一九四九年から五〇年へ」は、『ニューヨーク・タイムズ』の書評編集部員による良書の選出をもとに作品紹介を行なったもの。なかでも、本誌第九号に掲載されたノーマン・メイラーの『裸者と死者』を、これに勝る戦記文学が未だに現れていないと評価する。長谷川は、朝日新聞出版局渉外課長を務め、一九四九年から五一年にかけて『朝日新聞』に連載されたチック・ヤングの漫画『ブロンディ』の翻訳者として知られる⁽²⁾。

福田恆存による文芸時評「対面交通」は今号が二回目(福田恆存文芸論集「講談社文芸文庫、二〇〇四・五所収」。各誌新年号の膨大な作品のうち、三名の女性作家の作品を取り上げている。人氣を博した幸田文「渚の家」については、文章の悪さや描写が的確ではないところが目立つと批判。加賀淳子「浮雲城」は人物造形に厚みがなく、由起しげ子「ある月夜の散歩」は描かれた人物の感情が胡散臭く、起承転結を与えるため最後に「文学的」表現をとってつけていると指摘する。現代人の省察力と想像力と行動力の不足を憂える批評となっている。

小説には、久保田万太郎「うしろかげ」、井上友一郎「唐人お吉」の連載のほか、本誌第四号で掲載された豊田三郎の「名人位」の十年後を描いた「糸切歯」、翻訳小説にアン・ペトリの「ストリート」(並河亮訳)がある。加賀淳子は、今号の一ヶ月前の「改

造』(一九五〇・一)に発表した「浮雲城」で文壇にデビューした
女流作家。加賀はみずから「加賀の殿様の親類」と称していた
が、のちに虚偽であることがわかり、「林芙美子は、目次で加賀淳
子と並ぶと、「この女は何者か、こんな女と同じ号に書きたくな
い」と怒った」という。⁽²⁵⁾今号には、宇喜多秀家をモデルにした「流
瀆」(「足軽女房・薩武者」新潮社、一九五五・九)を発表した。
講談を思わせる本作の語りには、歴史書からの引用と見られる資
料の引用が確認される。加賀がどのような書物を典拠としている
か、あるいは偽史の要素があるかどうかは、検討すべき課題とな
るだろう。(朱信樺／しゅ しんか)

■通巻第一三号(第二卷第三号、一九五〇年三月)

今号に掲載された評論・エッセイは九篇、小説は四篇である。
文学以外の記事も散見され、本誌の総合誌的性格を示す。永井荷
風「ポーノグラフィとエロチシズム——春本と肉体小説」は、発禁
処分となった三城えふの「洞窟の女」(『小説世界』一九四九・
一?)をめぐる、春本と肉体小説の違いを問答形式で論じたもの
である。荷風は「洞窟の女」の発禁は当然の結果であり、描写が
あけすけでただ書きたいだけ、筆の走るまま書かれた春本である
とする。対して、一度、眼を通して頭に入れ、そこで濾過し、美
化するという芸術的態度をもって初めて、肉体小説を描くこ
とができるとする。三城の著作には、小説「つんぼの女」(『詩風
土』白井書房、一九四八・一二)、詩「世界の寡婦」(『造形文学』
市民書肆、一九四九・五)があり、いずれも女の肉体描写が特徴
的である。

アルベール・ポーフイレ「ヴァレリーの思ひ出」(訳者匿名)は、
二〇年来の友人である亡きヴァレリーとの思い出を綴ったもので
ある。ヴァレリーが大人数相手の講演よりも少人数の会話の方で
自分を發揮したこと、特に儀礼もなく、活淡な「フランス学芸会」
になじんでいたことなどが語られている。ポーフイレは一八四四
年生まれ、一九四八年没。日本語に翻訳された著書には、遺作と
なった *Le Legs du Moyen Age* (新倉俊一訳「中世の遺贈——フランス
中世文学への招待」筑摩書房、一九九四)がある。ミシエル・オ
リビエ「戦争と文学——ヴァレリーの場合」(訳者匿名)は、『メル
キュール・ド・フランス』一月号に発表されたジュールジュ・デュ
アメル宛ての書簡について、デュアメルが発表に際して付した序
言とともに、その内容を抜粋しながら紹介する。

永島正雄「教育危機の診断——「学問の自由」をめぐる」は、
東大の南原総長と文部省との間に繰り広げられている「大学管理
法案」「赤い教授追放」「学生運動取締問題」をめぐる抗争に言及
する。「学問の自由」を掲げ、文部省に対抗する南原学長は各大学
から多大な支持を得ているが、永島は批判的である。永島は、デ
フレによる不況から、大学卒業者の就職率が前年に比べて大幅に
低下していることを指摘し、学生が戦後最大の危機に見舞われて
いるとする。また、小・中学校についても、日教組が解散の危機
に瀕し、教育財政が不安定に陥っているとす。そこで、政治運
動はかりでなく、こうした危機に目を向けるべきという見解を示
している。永島は東京新聞記者。教育に関する記事を、雑誌『6・
3教室』(新教育協会)に多く執筆している。また、『改造』(一九
四九・四)にも「教育危機の実態——予算と竹馬教育」を寄せるな

ど、教育評論家として活動した。

武者小路実篤「自己のない人」(『我が人生の書』要書房、一九五三・七)は、「い、加減でものを言つたり、書いたりしてゐる人」を「自己のない人」として、その特徴について具体例を交えながら述べたものである。武者小路は『世界仏教』(世界仏教協会、一九四九・二)に同じ題の評論を書いているが、本記事の内容とは異なる。

内田誠「切山椒」は、ある結婚披露宴での老作家との菓子談義に始まり、京都の菓子、金沢の菓子へと話題が展開する。また、子供の頃、正月に食べていたという切山椒について、庶民的でありながらどこか品があるとして懐かしむ。内田誠(一八九三―一九五五)は、東京生まれの随筆家。著書に『緑地帯』(モダン日本社、一九三八・七)、『遊魚集』(小山書店、一九四一・四)、『いかるがの巢』(石原求竜堂、一九四三・六)がある。

久住良三「減税と演劇」は、演劇に掛けられていた一五割の税金が一〇割に減税されることになったことを受け、それだけでは観客の負担や舞台人の収入に大きな影響がないとはいえず、「演劇界がや、回生の兆を迎えた」と評価している。また、映画界の門戸閉鎖、劇場の増加といった要素が揃い、演劇界が好転しつつある中、後継者問題が生じていることを指摘している。久住は『演劇界』(演劇出版社)や『日本演劇』(日本演劇社)に多く執筆した演劇評論家である。

長谷川幸雄「海外文芸雑誌」は、イタリヤの作家、エリオ・ピッツトリ―二の「シリイにて」の紹介文である。短い小説ながら、イタリヤの風物、社会、貧困、人間味、時代が巧みに描かれてい

るとする。また、アメリカの大出版社、アルフレッド・クノップの編集総長から日本の現代文学について聞かれ、その際、大岡昇平の「俘虜記」の名が挙がったことを明かしている。長谷川は、直近では雑誌『アメリカ映画』(アメリカ映画研究所)での執筆が目立つ。著書には『アメリカの百面相』(桜木書房、一九四二・七)がある。本誌には二月号から引き続きの掲載となる。

福田恆存「対面交通」は多くの批評が冷酷であるということについて(『福田恆存文芸論集』講談社文芸文庫、二〇〇四・五)は、前月号の批評が冷酷だという意見を受け、「他人を責めるときでも自分のために自分をやっつけてゐるのであり、さらに相手をやっつけておけば、相手もまたほくを気がねなくやっつけられるであらうし、さうすればまたこつちのとくになると考へてゐるのにすぎない」と弁明している。文芸時評として取り上げているのは、中野重治「アンケート」、幸田幸之「断橋」などである。

北條誠「老梅」(『火の舞』山田書店、一九五五・二)は、芝居の演出や脚本を手がける光田が、娘、道子の結婚に際し、不吉な想像を巡らし、思い悩む様子を描く。道子は女房との子ではなく、昔関係を持った女優との子であった。その女優は道子の落ち着き先を決めるため、光田と一年あまり交渉を続けた。光田はそのことを振り返り、道子も実は、結婚相手とは別の青年との間に子をなしており、その子を私生児にしないため、泣く泣く結婚を決断したのだと空想するが、後にそれが大方の中していたことを知る。光田は道子を思い、苦しみながらも、風呂場の老梅を眺めながら、「もう一度老木に一枝の花が咲かせた」と願う。

真鍋呉夫「若い樫たち」は、戦時中、文学を志して博多から上

京した主人公啓一が仲間と文学活動に取り組みさまともにも、地の少女初子に抱き続ける恋心を描いた小説である。真鍋（一九二〇～二〇一二）は福岡県生まれの小説家。文化学院中退。作中で啓一が進学する「B学院」はこれを指すものであろう。この時期、真鍋は安部公房と親しく、一九五二年には（現在の会）結成に加わっている。安部は雑誌『エスポワール』のスタッフ・ライターを務めており、他のスタッフには「近代文学」周辺の中村真一郎、加藤周一、野間宏、花田清輝ら、『改造文藝』執筆陣がいた。²⁶真鍋も安部を通じて、これらの面々と交流があったと考えられる。（伊藤日依梨／いとう ひより）

■通巻第一四号（第二巻第四号、一九五〇年四月）

今号は「陽春小説特集」として、著名作家が名を連ねる。里見淳「泣蟲」、今日出海「独楽」（『天皇の帽子』ジープ社、一九五〇）、橋本英吉「生と死と」、外村繁「雪をんな」、火野葦平「馬と死刑囚」（『動物』北辰堂、一九五一・一二）、芹沢光治良「罪業」、久保田万太郎「うしろかげ」（第四回）、井上友一郎「唐人お吉」（第六回）、佐藤春夫「神絃記」（わが小説作法、新潮社、一九五四）、川端康成「笹舟」（『川端康成全集 第一集（掌の小説）』新潮社、一九五〇）の十作品が掲載されている。

これらの他に今号では、第二回横光利一賞受賞作とその選評が掲載されている。受賞作は永井龍男「朝霧」（『文学界』一九四九・八）。永井は受賞に際しての「寸感」として、「芥川・直木賞、菊池賞の創設当初から、事務一切を引受けて来た私は、様々な授賞者の姿を送り迎へたが、賞を受けるうれしさのかくあることを、

今日初めて知つたのである。殊に菊池寛先生の三周忌を数日後に控へて、横光利一氏の名に依る文学賞を得たことは、さらに深い感銘である」と記している。受賞直後、本作を含む作品集『朝霧』（改造社、一九五〇・六）が刊行された。

評論は三篇。三島由紀夫「オスカア・ワイルド論」（『狩と獲物』要書房、一九五一・六）は、みずからのワイルド体験を振り返りつつ、作品論を展開する。ここでワイルドをみずからの「同類」と呼ぶ三島は、「彼は常套句の美しさを知り、常套句しか信じなくなる。すると彼は凡庸に化身してしまふ」と語る。

花田清輝「寓話について」（改題「奴隷の言葉」、『アヴァンギャルド芸術』未來社、一九五四・一〇）は、同年一月に発せられたコミンフォルム批判を受けて、徳田球一らが反論として発したいわゆる「政治局所感」を「奴隷の言葉」と呼び、「新しい文学は、「奴隷の言葉」と訣別しないかぎり、決して誕生するものではない」という確信をもっている」と述べる。所感派と国際派、「人民文学」と『新日本文学』との対立が深まろうとしていた時期の、花田の政治的・文学的立場を示す一文である。青野季吉「百万人のそして唯一人の文学」は、同時代の文学において「純小説」と「通俗小説」の境目が曖昧になってきたことを問題とする評論。具体的な言及は行われていないが、同時期に中村光夫と丹羽文雄との間で交わされていた風俗小説論争に介入した一文と見ることができよう。

翻訳は二篇。対談として、フランソワ・モーリヤックとジャン・ルイ・キュルティス（本誌ではキュルティスと表記）による「世代的対話」が掲載されている。訳者は不詳だが、末尾にアルマン・

ガレー記との旨が記されている。二か月前の『改造』（一九五〇・二）には、アンドレ・モーロワとジュール・ロワによる対談「二つの戦後世代の対話」が掲載されており、これらはバリ『文藝週報』紙で企画された連続対談であるという。また、ミハイル・ゾシチェンコ「お猿の冒険」は、ソ連レニングラードの文学雑誌『ズヴェズタ』に掲載され、ジダーノフ批判の対象となつた童話を翻訳したもの。解題者・訳者ともに不詳だが、この作品を掲載するあたりに、反共一辺倒とは異なる本誌の編集方針が垣間見られよう。

エッセイは三篇。吉井勇「洛中雜記」は、京都生活十数年を迎えた作家が身辺を振り返りつつ、上田秋成の「詠梅花五十首」について語る。上林暁「新参記者の日記——改造社創業三十周年に寄せて」（『上林暁全集 第一四卷』筑摩書房、一九七八・七）は、一九二七年に改造社に入社した著者が、当時の日記を抄写したものの。賀川豊彦「死線を越えて」（上中下、改造社、一九二七・八）の校正作業や芥川龍之介の死、その後の『改造』編集部の変遷などを、同僚の水島治男、古木鉄太郎らとの交流をまじえて辿る。広津和郎「志賀氏と熱海」（『広津和郎全集 第二二卷』中央公論社、一九七四・三）は、熱海在住の著者と志賀直哉との交流について語る。

座談会「発禁」の参加者は勝本清一郎（国文学者）、西村孝次（英文学者）、奥野信太郎（中国文学者）、中込研尚（東京地検検事）、渡辺允夫（警視庁警部風紀係長）の五名。ノーマン・メイラー「裸者と死者」（前掲）や石坂洋次郎「石中先生行状記」（全三巻、新潮社、一九四九・五〇）の発禁問題を受け、当局関係者

を招いて話し合おうというのが、この座談会の趣旨である。『裸者と死者』を発禁処分としながらそれを取り消した経緯について、渡辺は「言葉がちよつと普通日本で使わないというような面があったものだから、一応これは線に入れよう」ということで摘発したものの、「それを翻訳された方（山西英一——引用者補）について、種々お尋ねしたりしますと共になお一方においては識者の方にもみてもらい、まぎれもなく立派な文芸作品と認められたので」取り消した、と説明している。しかし、社内事情を知る松浦総三は、当局が本書の発禁を取り消した背景に「米占領軍側からの抗議」があつたと指摘している。いわゆる「チャタレイ事件」とあわせ、表現の自由をめぐる当時の状況を知るうえで貴重な座談会であると言えよう。（梶尾文武）

■通巻第一五号（第二巻第五号、一九五〇年五月）

今号では討論一篇、評論・エッセイ五篇、小説五篇の掲載に加え、俳句特集が組まれている。読み切り小説の作者澤野久雄・石濱金作・諏訪三郎は、いずれに川端康成周辺の人物である。石濱の作は菊池寛を、諏訪の作は葛西善藏を悼む性質のものである。

澤野久雄「道化師」（『松前富士』角川書店、一九五七・七）は、市役所に勤める主人公の、結婚する従姪のために抽選予定の市営住宅を便宜するか否かという葛藤を主題とした小説である。かつて澤野は「挽歌」（『文学雑誌』一九四九・五）が第二回の芥川賞候補に選ばれた際、川端から私信にて批評と激励を受けている。澤野は同年朝日新聞で連載の始まった「舞姫」（『朝日新聞』一九五〇・一二・一二〜一九五一・三・三二）の担当者でもあった。

俳句特集では『ホトトギス』周辺から中村汀女「春水」、そこから離反した新興俳句運動の周辺から山口誓子「虹」、さらにその膝下を離れた人間探求派の周辺から加藤楸邨「病後」、中村草田男「白砂青松」、石田波郷「ブロンベ以後」が掲載されている。杉浦明平「現代俳句の運命」(「革命文学と文学革命」弘文堂、一九五八・一二)は、俳句における封建的なものからの脱却を説く評論。俳句形式で現代的思想を形象化する努力は、形式の破壊なくして俳句が近代化しえないことを明らかにしたものの、かえって「東洋的なもの」という仮象を永続させることに与してしまっている」と指摘する。

石濱金作「青春行楽記——人間・菊池寛」は、作者本人であると思われる「私」が、一九四八年三月に没した恩人菊池寛との思い出を語る小説。『文藝春秋』に石濱の「秋の挨拶」が執筆された頃(作中では大正一三年となっているが、実際は一九二五年の九月発表)から始まり、昭和三年に出会ったカフエの女給「たつえ」との関係を主軸としながら、「私」が菊池の紹介で「優駿」(一九四一・五創刊)と思われる雑誌の主幹となった話が配され、末尾で菊池の死没に触れる。実在したカフエ・タイガーでの観桜会の様子は、石濱の「大カフエ時代」(『文藝春秋』一九二九・七)にも見られ、菊池寛をモデルとした広津和郎の小説『女給』(『婦人公論』一九三〇・八)などとの同時代性が看取される。今号と同年同月の『文藝讀物』には、川端康成を中心とした「青春修行記——無常迅速」が掲載されている。

諏訪三郎「泥濘の人生——人間・葛西善藏」もまた、作者らしき「私」が一九二八年七月に没した葛西との思い出を語る小説であ

る。大正一一年四月、当時中央公論社編集者であり、原稿の依頼のため葛西の住む寶珠院を訪れた「私」は葛西の小説に魅了されていたが、おせいという女性への葛西の態度をめぐって格闘したことをきっかけに疎遠になる。葛西の奇行や酒乱ぶりが語られる一方、「私」は「人生の泥濘」の中をのたうちまわりながら小説を創作した彼を尊敬していると結ぶ。石濱作品は今東光、吉井勇、里見弴、横光利一、池谷信三郎、片岡鉄平、川端康成らに、諏訪作品は長谷川如是閑、牧野信一、瀧田栲蔭、古木鉄太郎に言及しており、いずれも文壇見聞録として興味深い。

菅季治「弱い魂」(『人生の論理』草美社、一九五〇・五)は、いわゆる「徳田要請問題」の証人であった筆者の遺稿の一部である。菅は一九五〇年の二月から、当時の日本共産党書記長徳田球一がソ連に対し抑留中の日本人の帰還を妨げるよう要請したとされる政治問題の渦中にあり、喚問の翌日同年四月六日に鉄道自殺を遂げた。アミエル著『アミエルの日記』(河野与一訳、岩波書店、一九三五)を中心に様々な文献を渉猟しながら、「自分の自己同一の確かさを信じ得ない」弱い魂は他人一般に否定性を感じ、傍観者として消極的な生き方になるが、ゴーゴリの「外套」の主人公のように仕事に熱中することで救われると述べる。務臺理作「ヒュウマニズムと弱い魂」(『第三ヒュウマニズムと平和』培風館、一九五一・一一)は、東京文理科大学時代に菅季治の師であった筆者による一文。「ヒュウマニストの立場」から新聞各紙の報道を批判し、菅は嘘の証言をしたのではなくむしろ「眞理の側に立とう」としたのだとしてその善良さを擁護する一方、自殺という結果は政治闘争の激しい「現代のヒュウマニストの魂の弱さを示す」

とし、個人と社会の間のズレを克服するためには歴史的必然の上
に立つ新しい社会の人間化を目指す必要があると説く。

中島健蔵・野間宏・福田恆存・本郷新・福澤一郎による座談会
「変革期のリアリズム」は、リアリズムを技術よりむしろ大衆との
結びつきの問題として論じている。展覧会中心のタブロー主義を
退けながら、新しい「額縁」を新たに考え直す必要があるとし、
作家と鑑賞者に作品がどのような役割を果たしているかを意識す
る効用主義が提案され、特に「誰のためにかくか」ということが
強調されている。

勝本清一郎「藤村漂白時代のころ——藤村は何を小説に書か
なかったか」(『日本文学研究資料叢書 島崎藤村』有精堂出版、一
九七一)は、島崎藤村の論や年譜は実際とは異なる点のある小説
からではなく客観的な資料を基に作られるべきだと述べた上で、
「櫻の熟する時」(『文章世界』一九二三・一〜一九一八・六)と
「春」(『東京朝日新聞』一九〇八・四・七〜八・一九)の間の描か
れなかった漂白期を検討する材料として、『文学界』編集者天野天
知に宛てた一六通の書簡に註を付して公開する。

三好達治「お花見階級」(『三好達治全集 第八巻』筑摩書房、
一九六五・九)では、満洲事変以降勃興し、東京を中心に膨張す
る非近代的でありながら現代的な新興階級について論じられてい
る。プロレタリアートとは異なる趣味嗜好的な階層として、花見
の酔払いのように示威的で享樂的利他的な人々がいることを批判
的に指摘し、そこに国民的素質の急速、排他的な発展を見る。そ
の原因を「事變以来の荒廢した人情」よりは人口の過剰に求める
が、素質の発展と人口の膨張は双方制約し合えるものではないこ

とを不安視する。

連載中の作品として、久保田万太郎「うしろかげ」(八〜一〇)、
井上友一郎「唐人お吉」(第七章)が掲載されている。
(川上優芽/かわかみ ゆめ)

■通巻第一六号(第二巻第六号、一九五〇年六月)

今号掲載の小説は四篇。巻頭を飾るのは、松原一枝の中篇「兎
と亀」である。かつて満洲国国の「m会社」で勤務した同郷の二人
の男・山田と北山の物語。北山は会社で一躍出世し、張作霖との
裏工作を謀るが、その直前に張が爆殺される。帰国した北山が建
国後の満洲を訪れると、そこでは日本人官吏が征服者として跋扈
していた。他方、満洲国建国後も当地にとどまった山田は地道に
出世を遂げたものの、敗戦により財産の全てを失い、引き揚げる。
やがて妻に先立たれた山田は、年の離れた後妻を迎えようとして、
息子たちに猛反対される。作品の末尾、二人はたまたま観た映画
「兎と亀」に囚ならずも涙するのだった。この映画は一九二四年製作
のアニメーション「教育お伽漫画 兎と亀」(山本早苗監督)であ
ろう。作品は北山の視点から「満洲国」の情勢を活写して政治小
説の趣きを備える一方、山田の結婚問題を通して家庭小説風の味
わいを醸す。作者松原一枝(一九一六〜二〇一一)は出生後、一
九三七年まで大連に在住した経験をもっている。なお後年、松原
は評伝『改造社と山本実彦』(南方新社、二〇〇〇・四)を著し、
その執筆に際しては山本実彦の息子にして本誌の初代編集長・俊
太に取材を行なっている。取材当時の山本俊太はフロリダに在住
していたという。また、松原と文壇人との交流関係は、晩年の著

作『文士の私生活 昭和文壇交友録』（新潮新書、二〇一〇）に詳しい。

井上友一郎「唐人お吉」連載第八回は、第八章「誰が袖」を掲載する。続く第九章「黄楊の横櫛」から第十一章「稲生沢川」までを収め、この年の末に単行本「唐人お吉」（改造社、一九五〇・一二）が刊行された。井上は本書の「あとがき」において、この作品を『改造文藝』編集部のある岩本常雄の徳憑によって書き始めたこと、岩本の病気休養にともない、同編集部の酒井孝一の協力を得たことを明かしている。またあわせて、雑誌掲載時から挿絵を描き、本書の装幀を担当した木村荘八に感謝の言葉を記している。この他に今号には「横光賞作家二人集」と称して、大岡昇平と永井龍男の作品が掲載されている。大岡の作品は「敗走紀行」、永井の作品は「十九歳」である。

これらの小説作品の他に、椎名麟三をインタビュアーとする座談会「頼者の声——文学と人生」が掲載されている。ハンセン病療養施設多磨全生園で文学活動を営んでいた田所靖二・厚木勲・村井暁・盾木汎・田尻敢が参加し、恋愛や結婚、断種の経験や、みづからの文学活動について発言する。彼らの作品の多くは、盾木の編により後年刊行されたアンソロジー『ハンセン病に咲いた花——初期文芸名作選戦後編』（皓星社、二〇〇二・八）で読むことができる。

今号には、「世界の文藝」と題し、同時代のアメリカ、ソヴェト、イギリス、中国、フランスの文学的動向を紹介する記事が載る。執筆者とタイトルは順に磯部祐一郎「知的大衆とフォークナー」、関根宏「レアリスム論争」、西村孝次「灰色の文学」、島田

政雄「都会」とのたたかい」、渡邊淳「コミュニティ系の作家たち」。いずれも、この時期における外国文学の受容状況を伝えて興味深い。G・S・フレイザー「戦後イギリス文学の傾向」（平松幹夫訳）は、中日英国使節団文化顧問を務めていた筆者が、ロンドンを中心とした詩人や小説家たちの動向を紹介する。また、高桑純生の評論「二つの自殺——戦後青春の両極」は、「光クラブ」事件を引き起した東大生・山崎晃嗣の自殺と、シベリア引揚者をめぐる「徳田要請問題」に際し証人喚問された哲学者・菅季治の自殺とを取り合わせて論ずる。

福島慶子のエッセイ「幽霊東へ行く」は、戦後日本人のアメリカへの憧れを揶揄しつつ、自分の国を知るために外国へ行くことを勧めたもの。福島慶子は美術評論家の夫繁太郎とともに戦前にはパリに在住し、戦後は東京銀座で「フォルム画廊」を経営していた。高木正孝・マドレーヌ夫妻による対談「にほん・めんたりにてい」では、専らフランス人の妻が日本に抱く違和感について語り、夫がそれを日本文化の特質として論理づける。高木正孝（一九一三—一九六二）は、『パタゴニア探検記』（岩波新書、一九六八）等の著作を持つ登山家・心理学者。二五歳で渡欧し、一九四四年にスイスの公使館で同僚だったマドレーヌと結婚、四七年まで現地に滞在した。五二年に離婚したのち登山家として活動、五三年には神戸大学理学部助教に就任し、山岳部長を務めている。六二年、学術調査中に南太平洋で消息を絶った。⁽²⁸⁾

平林たい子のエッセイ「いたずらの世界」は賭場について語ったもの。ヤクザと賭博の世界を描いた自作『地底の歌』（文藝春秋新社、一九四九）についての言及がある。歴史学者の李家正文の

エッセイ「留置場の壁の花」は、全国各地の留置所の壁に被疑者が残した落書きを蒐集し、それらが意味するところについて語ったもの。

今号の目玉となっているのが、「ストリップ・ショウ」と題された特集記事である。社会心理学者の南博による論考「性の狩人たち」、本誌特派記者による実態調査「裸姫と観客」のほか、座談会「ストリップ・テイザーの人生観」が掲載されている。南を司会とするこの座談会には、三人のストリップパー（伊吹マリ子・園マリア・水原登美）と一人のマネージャー（吉田厚子）、覆面の作家（X氏）と評論家（Z氏）が参加している。やや遡り、一九四九年一月には『改造』に座談会「パンパンの世界」が掲載されていた。五人の街娼のほか、飯塚浩二・宮城音弥・佐多稲子・三島由紀夫・森田政次が訊き手として参加した座談会である。この座談会と同じく南博を司会としており、ストリップを大きく取り上げた今号の企画はこれと連動していると見られる。性風俗や賭場、留置場といった、アウトローの世界に関する記事が多く掲載されているのが、今号の特徴である。今号をもって『改造文藝』の刊行は終了したが、巻末には予約購読の広告が付されている。本誌の終了は編集部も予期せぬ事態だったようである。

（梶尾文武）

注

- (1) 和田芳恵「文藝」(『日本近代文学大事典 第五巻』講談社、一九七七・一一、三二七頁)。
- (2) 戦前、改造社で『文藝』の編集主任を務めたのちに作家に転身

した上林暁は、本誌に「新参記者の日記—改造社創業三十周年に寄せて」(『改造文藝』一九五〇・四)を寄稿した際、「文藝」の後身であるところの「改造文藝」編輯部は、縁故ある私に、在社当時の思ひ出を何か書けといふ」と記している。

- (3) 松浦総三「戦後より廃刊まで」(松浦他編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』前掲、二二六頁)。
- (4) 十重田裕一「横光利一と近代メディア—震災から占領まで」(岩波書店、二〇二一・九、八六頁)。昭和期における改造社と横光との関係については、本書に詳しい。
- (5) 大輪については、小坂部元秀「下北沢の三奇人(一)」(『文遊』第二三号、二〇〇四・三)に詳しい。
- (6) 水島治男『改造社の時代』(戦中篇、前掲、二六九頁)。
- (7) 松浦総三「戦後より廃刊まで」(松浦他編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』前掲、二二二頁)。
- (8) 松浦総三「戦後より廃刊まで」(松浦他編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』前掲、二二二—二四頁)。
- (9) 板垣直子「作家の仕事 今年度の文壇を回顧」(『中京新聞』一九四八・一一・二三)↓『文芸時評大系 昭和篇Ⅱ第三巻』ゆまに書房、二〇〇八・一〇)。
- (10) 井伏鱒二「解説」(『藤原審爾作品集Ⅰ 秋津温泉』森脇文庫、一九五七・一一)。
- (11) 今号掲載の「隨筆二題」は、のちに「隨筆億劫帳」に収められたが、なかでも「雀」は、戦中日記(一九四五年二月一日)、『新輯内田百閒全集』第二十三巻、一九八八・九)の記述と多くが重なる。さらに『東京燒盡』(講談社、一九五五・四)に「第十八章 雀」として再録された。他方、「目白落鳥」は本誌掲載にあたって明記されているように、第七節は『新方丈記』(新潮社、一九四

八・二)より一部抄録したものである。具体的には、「土手の東雲」(旧題「新方丈記」、『新潮』一九四六・五)の第六節からの抄録である。また、同作の一節から六節は、一九四七年七月三十一日から同年八月十七日の日記(『新輯内田百閒全集』第二十四卷、一九八八・一〇)より一部改稿、削除を施したものである。

- (12) 吉田茂は和装を好み羽織や白足袋をしばしば着用していたが、高坂正堯「宰相吉田茂論」(『中央公論』一九六四・二)↓「高坂正堯著作集 第四卷」都市出版株式会社、一九九九・一二)が指摘するように、白足袋や葉巻に見られる彼の警沢趣味は「当時の苦しくてみじめな日本人の生活とはまったくかけ離れたもの」であり、その印象から「白足袋宰相」などとマスコミからは揶揄された。以上のような吉田の服装に象徴される格式を尊重とする態度と国民の生活の実体の乖離こそが、ここで取り上げられている「白足袋問題」である。時評内では吉田の白足袋に対して国民からそのような批判が上がることで自身が問題とされているが、一方で高坂は「国民は、ひそかに小気味よく思ってそれを見ていた」のであり、「吉田の白タビと葉巻にかつての日本の栄光の名残を見出し、敗戦によってうちひしがれない人物を発見した」とも指摘しており、必ずしも否定的な見解のみが国民の間にあったわけではない。

- (13) 『日本ペンクラブ三十年史』(日本ペンクラブ、一九六七・三)。なお、鈴木と本誌執筆者および日本ペンクラブ幹部(水島治男、豊島与志雄、辰野隆ら)には、一九四八年四月に発足した東京ユネスコ協力会の評議員同士としての接点もある(松尾邦之助『ユネスコの理想と実践』組合書店、一九四八・一一)。

- (14) 本作の内容は、田村による回想録『わが文壇青春記』(新潮社、一九六三・三)と多くが重なる。また、戦後におけるペンクラブ

再建の動向については、『日本ペンクラブ三十年史』(前掲)に詳しい。

- (15) 松本清張『日本の黒い霧』(文藝春秋新社、一九六〇・五)
- (16) 『内田百閒・高田保・尾崎一雄集』(角川書店、一九五四・八)所収の高田の年譜を参照。
- (17) 千田是也『『猿蟹合戦』—傍白』(千田是也演劇論集 第2巻)未來社、一九八〇・七。
- (18) 『村山知義・三好十郎・真船豊・久保栄集』(講談社、一九六七・五)所収の真船の年譜を参照。
- (19) 北村小松『猿から貰った柿の種』(原始社、一九二七・四)。小山内薫に師事する北村の戯曲を八篇収録。一作目「猿から貰った柿の種」は、二七年四月に築地小劇場公演に際して上演禁止され、本戯曲集も発売禁止せられた問題の戯曲。
- (20) 山崎國紀「横光利一・『母』への原体験—その初期作についての考察」(『立命館文学』、一九七二・一〇)、栗坪良樹「横光利一の人と作品」(『鑑賞日本現代文学十四 横光利一』角川書店、一九八一・九)等。
- (21) この評論の原稿は、早稲田大学図書館が所蔵している。村田聡史「新収資料 丸岡明」「三田派・早稲田派—文壇早慶戦」(『ふみくら』早稲田大学図書館、二〇一〇・三)参照。
- (22) 「裸者と死者」を任意提出」(『朝日新聞』一九五〇・二・二八)に「ワイセツ文書頒布罪の疑い」として都内小売店から回収の旨、「処分取消」「裸者と死者」(『朝日新聞』一九五〇・二・二八)に取り調べの結果捜査打ち切りとなった旨が報道されている。
- (23) W・H・チェンバリン「日本の印象」(『公論』第一公論社、一九四〇・一〇)等参照。
- (24) 「漫画プロンディ紹介 長谷川幸雄氏 死去」(『朝日新聞』一九

九〇・七・一九)

(25) 松浦絵三「戦後より廃刊まで」(松浦他編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』前掲、一三四頁)

(26) 鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、二〇〇七・五、二六―二七頁

(27) 松浦絵三「戦後より廃刊まで」(松浦他編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』前掲、一二六頁)

(28) 高木の生涯については、円満字正和『登山家高木正孝―その人生とアルピニズム』(私家版、二〇〇七・三)に詳しい。著者円満字は神戸大学山岳部で高木の薫陶を受けている。